聖華快楽書店

R18
ADULT ONLY

～魔法少女が敵怪人に憑依されて肉体を弄ばれるまで～

聖冥 魔法少女セイントリリィ・

著者◆夜空さくら
原案◆エルトリア
表紙◆夕月ひじり
挿絵◆東海 聖夜
いそろく
ガイロウ
レプリ
アナム111
Ai Kisaragi
brick
もけろー


魔法少女
セイントリリィ・
聖冥
～魔法少女が敵怪人に憑依されて
肉体を弄ばれるまで～
文字数◆約70,000字
挿　絵◆16枚
聖華快楽書店


リリィ ダークネス
Lily Darknegg
私立白雪女子高校に通う１８歳の女の子。
魔法界の賢者マギサから力を授かり、
魔法少女リリィダークネスに変身できるようになった。
影や暗闇などの闇を操ることが出来る。
その高い戦闘センスから現役最強の魔法少女と呼ばれている。
生真面目な性格で学校では生徒会長を務める。
巷を騒がせる憑依怪人との戦闘になるが……。


リリィシャイニング
Lily Shining
聖ウルスラ女学院に通う１８歳の女の子。
魔法界の賢者ルミナスから力を授かり、
魔法少女リリィシャイニングに変身できるようになった。
浄化の光を操ることが出来る。
ダークネスとコンビを組んでおり固い絆で結ばれた
パートナー同士。
箱入りお嬢様で少々世間知らずなところがある。
淫魔による昏睡事件を解決する為、現場へと向かったが……。


「……憑依、出来ちゃったよ」
ダークネスの声で、
憑依怪人ヒュウが発言する。
「なんで成功した……？」
ふと自分の体を見下ろし――
極上の女体を実感して、にやりと笑った。
「疑問はあるが……
まずはこの手に入れた体を
楽しまなきゃ損だな……！」
とてもダークネスとは思えない
下品な表情を浮かべたヒュウは、
まずは露出の大きいコスチュームで
余計に目立っている乳房を、
両手で鷲掴みにする。



「……っ」

授業中に派手な動きをするわけにもいかない。

そういうわけにはいかないのだが、
月奈はこっそりと股間に自分の手をやり、
握っていたシャーペンのノック部分で軽く
自分の割れ目をなぞった。

ショーツ越しとはいえ、刺激に飢えていた
月奈の股間は、激しく反応してその愛液を
さらに滲ませてしまう。



ディープキスを続けながら、
月奈の手が真央の制服の中に滑り込んで来ていた。

太ももの後ろ側という、普通に過ごしていれば
他の人に触られることなどほとんどない場所を、
月奈の手が摩っている。

身体を抱き締めていた手も、
裾から中へ滑り込んで来て、
無防備な背中を掌で直に撫でられる。

普通ならありえないショーツとブラを
身に着けていた聖羅は、特に気にすることなく、
股間と乳首を弄り始めた。

（んっ……膣は……
まず全体をゆっくりめに……
それから、
しっかりクリトリスの周りを刺激して……）

淡々と、オナニーを始める聖羅。
頭の中で、どこで仕入れたかも忘れた
オナニーの手順を反芻していた。


「んあああ♥ダークネスぅ♥」
「んっ♥二人で、気持ちよくなりましょ？シャイニング♥」
ディープキスをして、
互いの性器を弄り始める。
大乱交が起きていると真ん中で、
二人はレズセックスを始めていた。


聖華快楽書店
R18
ADULT ONLY
～魔法少女が敵怪人に憑依されて
聖冥
魔法少女
セイントリリィ・
肉体を弄ばれるまで～
著者◆夜空さくら
原案◆エルトリア
表紙◆夕月ひじり
挿絵◆東海 聖夜
いそろく
ガイロウ
レプリ
アナム111
Ai Kisaragi
brick
もけろー

◆プロローグ

この世界は淫堕神ネビリムと呼ばれる邪神によって、侵略を受けていた。

使徒を扇動して世界を支配しようとする邪神に対抗するには、通常兵器ではままならず、魔法界から力を授けられて戦う魔法少女たちの力が必要だった。

長年続くネビリムの使途と魔法少女たちの戦いは苛烈を極めていた。

そんなある時、本来は人類の守り手となるべき魔法少女がネビリムの使徒に堕ちて反旗を翻す『ネビリムの災禍』と呼ばれる大事件が勃発。

多大なる犠牲を出してしまったその災禍は、終結した後も魔法少女たちの中では語り草となっていた。

その災禍を終結させたものこそ、二人組の魔法少女。

リリィダークネスとリリィシャイニングだ。

現役最強と名高いリリィダークネスと、相棒のシャイニング。

二人の魔法少女は『ネビリムの災禍』から一年経ったいまも、魔法少女としてネビリムの残党と戦っている。

その日も、魔法少女とネビリムの残党の熾烈な戦いが繰り広げられていた。

二人の魔法少女は逃げ惑う人外を追いかけ回していた。

「チィ……！　シツコイ！」

ネビリムの残党であるその人外は、見た目は青白い肌をしたサキュバス――淫魔だった。

多くの人を惑わし、人生を狂わせた挙句、命を奪って来たその存在に、魔法少女たちは一切容赦をしない。

「ライトボム！」

強烈な閃光が放たれ、淫魔の目を眩ませた。

悲鳴を上げ、逃げ惑っていた淫魔の足が鈍る。

「いまですわ、ダークネス！」

閃光を放った魔法少女が声を張り上げる。

彼女の魔法少女としての名前はリリィシャイニング。

白銀の長髪を風に靡かせ、怪物に臆することなくその青い目を向けている。身にまとった衣装には青系統寄りの白色が目立つ。

見た目は非常におっとりとした、深窓のお嬢様と言った風情だった。

その柔らかい相貌に、いまは凛々しく研ぎ澄ました刃のような、真剣な表情を浮かべている。

「任せて……！」

そのシャイニングの声に応えたのは、同じく同年代の少女。

魔法少女としての名前はリリィダークネス。

癖一つない黒髪を靡かせた頭に、占い師や魔法使いのイメージが強い、唾が広く先端が尖がった帽子を被って

いる。

衣装の色は全体的に黒が目立ち、足を覆うタイツなどは煽情的な魅力があった。

顔立ちはクールな美少女といった様子で、鋭くつり上がった目で怪物を睨みつけている。

「捉えた！」

ダークネスは影を操り、淫魔の身体に絡みつかせる。

「シャドウバインド……！」

淫魔は必死に抵抗しようと藻掻くが、ダークネスが操る影の力は凄まじく強く、その体が徐々に拉げて行った。

「グギャアアアアッッ！」

「……ッ！　はあああ！」

影から多くの情報を得ることが出来るダークネスは、淫魔に巻き付かせた影から、肉が潰れ骨が折れる感触を受け取っていた。

気味が悪い感触に顔を顰めながらも、一切の慈悲なく、さらに力を込めていく。

耐え切れなくなった淫魔の体が、捻じ曲がるようにして影の中に収納されて行き、最終的には黒ずんだシミのようになって消えていってしまう。

首尾よく敵を一蹴したかのようにみえた。

だがダークネスは、その豊かな胸に手を当て、苦しそうに喘いでいる。

「はぁ……っ、はぁ……っ、はぁ……っ」

ダークネスは体の内側から溢れて来そうになる破壊衝動を必死に抑えていた。
ダークネスの力は強大だが、その実、暴走のリスクを多分に孕んでいるのだ。
そのため、敵を倒した直後などは精神が不安定になり、危うかった。
「くっ……！　ダメ……ッ」
ダークネスが持ち前の強い正義感でその破壊衝動を抑えていると、いつの間にか近くに寄って来ていたシャイニングが、彼女の手に自分の手を重ねる。
「素晴らしかったですわ。さすがはダークネス。わたくしの相棒。……大丈夫、わたくしが傍におりますわ」
安心させるように囁き、自分の体に宿した光の力を僅かに放出するシャイニング。
その光は、ダークネスの体を照らし、春の日差しのように暖めた。
暖かさを感じると共に、ダークネスの中から刺々しい感情が解けるようになくなっていく。
ダークネスは目を閉じて、暫くじっとしていた。
再び目を開ける頃には、ダークネスの呼吸はすっかり落ち着いている。
「……ありがとう、シャイニング。もう大丈夫」
「お安い御用ですわ。いつも無理をさせてしまって申し訳ありません。わたくしも攻撃を担当できればいいのですが……」
シャイニングの力は浄化の力であり、どちらかといえば支援・回復向きの能力だった。
魔の者に対して無力ではないものの、攻撃に向いているダークネスのそれに比べれば、破壊力の差は歴然だ。

ゆえに戦闘中はダークネスのサポートに徹し、戦闘後のケアがシャイニングの主な役割だった。

「いつも助かってるよ。シャイニングがいてくれるから、私は戦えてる」

ストレートに感謝の言葉を口にするダークネスに、シャイニングは気恥ずかしそうに身を捩った。

「い、いやですわダークネスってば。わたくしがあなたをサポートするのは当たり前ですの！　ダークネスはわたくしの大事なパートナーなのですからね！」

照れ隠しなのか、早口でそう言い募るシャイニング。

ダークネスはそんな彼女の言動に、微笑ましいものを見る視線を向けていた。

二人は性格も違えば、通っている学校も全く違う。

本来ならば接点もなく、交わることのなかった存在だ。

だが、魔法少女として活動し、紆余曲折あってパートナーとして行動を共にするようになり、『ネビリムの災禍』を始めとした多くの戦いを経ている内に、互いを心から信頼し合っていた。

能力的な相性もあるが、唯一無二の相棒として精力的に魔法少女の活動を続けている。

戦いが終結するのを離れたところで見守っていた街の住民たちに対し、二人は揃って声をかけた。

「悪しき者は私が闇で塗り潰し――」

「わたくしが光で照らしましょう――」

「私たちセイントリリィがいる限りは」

「ネビリムの使徒の好きにはさせませんわ！」

この街を守る魔法少女はここにいる、と。

他の魔法少女たちがそうするように、彼女たちもまたそう宣言することで街の住民たちに安心と希望を与えているのだ。

二人の魔法少女を、街の住民たちの喝采が包み込む。

◆第一話　魔法少女リリィダークネス

魔法少女リリィダークネスとして活動している黒桐月奈（こくとうるな）は、普段は私立白雪女子高校に通う極普通の女子高生だ。

そんな彼女は現在、魔法少女になる力を彼女に与えた魔法界の賢者たちからの指令を受け、巷を騒がせる怪人を討伐するために動いていた。

セイントの輪というチャットアプリを介して指令を受け取った彼女は、ひとまず怪人が出現したというポイントにやって来ていた。

制服姿で街角に立った彼女は、周囲を見回して誰にも見られていないことを確認した上で、変身する。

「セイントエナジー・メイクアップ……！」

その身体に纏っていた制服が一瞬で掻き消え、その後には魔法少女のコスチュームを着た月奈が――リリィダークネスがいた。



首尾よく変身したダークネスは、その場にしゃがみ込んで地面に手を突くと、闇魔法を発動させる。

すると彼女の影がぐにゃりと変形し、周りの影に繋がって、さらにその繋がった影がまた別の影に繋がって、と繰り返して大きく広がって行った。

影を用いた探査術であり、それによってダークネスは通常よりも遥かに広範囲の場所を探れていた。

蜘蛛の巣のように広がっていくイメージで影を広げて行き、そしてその影に何かが触れる。

（……いた！　上手く隠しているけれど……私は見逃さない……！）

目を見開いたダークネスは、反応があった方向へと向かう。

走りながら、パートナーであるリリィシャイニングに電話を掛けた。

本来であれば、二人はパートナーとして一緒に行動しているべきなのだが、この日はなぜかシャイニングと連絡が付かず、一緒に行動できていなかったのだ。

電話のコールを待つこと数十秒。ようやく相手が電話に出たことで、ホッと胸を撫で下ろす。

「聖羅（せいら）……いえ、シャイニング？　いまどこにいるの？　私は討伐指令を受けた怪人を補足したところなんだけど、来れそう？」

二人は本名を教え合っているが、魔法少女として活動している際には、本名では呼び合わないことにしている。

『……ああ、すみません。大丈夫ですわ』

電話の向こうから聞こえて来た声に、思わずダークネスは足を止めていた。

「シャイニング……？　あなた、なんだか様子が……」

『なんでもありませんわ。実は、いまわたくしも怪人を追いかけているところでして』

「なんですって！？」

『ああ、でもわたくし一人でも倒せそうな雑魚のようですので、心配はご無用ですわ。申し訳ありませんが、逃げられては困りますので、切りますわね』

「ちょ、ちょっと！　シャイニ……切れた」

まくしたてるように状況を説明され、そのまま通話は切れてしまった。

怪人を追いかけていて余裕がなかったといえばそうなのだろうが、それにしてもなんだか妙に違和感を覚えてしまう。

ダークネスは一端討伐依頼を受けている怪人を放置してシャイニングの方に向かうべきか考えたが、彼女がどこにいるかもわからないのでは、そちらに行きようがない。

もう一度電話をかけようとしたが、恐らく出られない状況であることは想像に難くない。

（あとで落ち着いたら何があったか聞けばいいわ……この反応が消える前に、仕留めないと……！）

闇の魔力が反応している場所に、ダークネスは急いだ。

確かに感じていた嫌な予感を振り切るように。

闇の魔力を感じた裏路地に到達したダークネスは、油断なく周囲を見回していた。

（今回の怪人は、憑依能力を有した怪人らしいから……誰かに憑依される前に仕留めないと……）

そんなことを考えながら裏路地を歩いていた彼女は、ふと路地裏の一角で微かに声がしていることに気付いた。

「そこね……！」

油断なく、いつでも攻撃出来るように影を練りながら、その一角を覗き込み――練っていた影が解けてしまった。

なぜなら彼女が覗き込んだ場所には、あられもない格好をした同年代の女子がいたからだ。

「んっ……ンぁ……っ、あっ、ああっ……！」

壁を背にしゃがみ込んで、その手を自分の体に這わせている。

制服を半分脱いで下着を晒し、その下着の中に手を突っ込んで弄り倒していた。

それは間違いなく、女性が自慰をしている姿だった。

ダークネスが硬直してしまった理由はそれだけではない。

（こ、この子……！　生徒会の……！）

それはダークネスの通う高校で、生徒会の書記を務めている女子だった。

ダークネスも生徒会に所属しているので、顔見知りだったのである。

引っ込み思案で目立たない感じの存在だったが、同じ生徒会に入っていればある程度は話をする。

そんな彼女の痴態が突然目の前に展開されるのだから、その動揺が如実に表れても仕方なかった。

（そ、そんな趣味があったなんて……！　見ちゃ、悪いわよね……！）

慌てて体を隠そうとしかけたダークネスだったが、その前にバッチリ目が合ってしまった。
生徒会書記の彼女は、普段の姿からは想像することも出来ない、はしたない表情を浮かべていた。
その顔を見た瞬間、ダークネスは閃きを得る。
（私は、馬鹿なの……！？　今回の討伐対象は、憑依怪人でしょうが！）
憑依される前に倒そうと考えていたが、すでに憑依したあとなわけだ。
ダークネスは彼女の正面に立ち塞がるように、破廉恥な格好をした女子の前に立った。
「そこまでよ！　憑依怪人！　い、いますぐその子から、出て行きなさい！」
そう勇ましく命じたはいいものの、ダークネスの視線は明後日の方向に泳いでいた。
なにせ現状生徒会書記の彼女の姿は、服が脱げかけて下着が露出し、その下着も激しいオナニーのためにズレて、乳首や性器が見えてしまっている状態だったからだ。
壁を背に立ち上がった女子は、悔しそうに歯噛みしていた。
「くっ……！　リリィダークネスか……！　来るのが早い……！」
ダークネスは最強の魔法少女として恐れられている。
それは憑依怪人も良く知っていることだったため、かなり怯えているように見えた。
憑依怪人はその力の性質上、直接戦闘に長けてはいないのだ。
「くそぉ、こんなところで……！　このヒュウ様が……！」
「か、堪忍しなさい……っ！　逃がしは、しないわよ！」

そう言って影の力を展開し、憑依怪人・ヒュウを取り囲むダークネス。
ヒュウはしきりに周囲を見渡して逃げる道を探していたが、その隙間はほぼない。
焦るヒュウだったが、ふと、自分の方にダークネスが視線を向けて来ていないことに気付いた。
「……ん？　お前、もしかして……恥ずかしがってんのか？」
「っ！　違うっ！　バカに、しないで！」
ダークネスはヒュウが何か言う前に取り押さえようと、ヒュウに向かって飛び掛かる。
そこでヒュウは、スカートのみならずショーツまでもずり落とし、憑依している生徒会書記を下半身裸にする。
「なっ！？　な、なにしてるの！」
取り押さえようとしていたダークネスは、ヒュウにしてみれば面白いほど動揺し、目を逸らして止まってしまう。
それは敵の前で見せるには、致命的に過ぎる隙だった。
「隙ありっ」
「あっ――んぶっ！？」
すぐにヒュウの方に向き直ったダークネスだったが、その時にはすでにヒュウが距離を詰めていた。
生徒会書記の顔が目の前に近付き、柔らかい感触が口に触れる。
キスされた、とダークネスが頭で理解するのも刹那。
その合わさった口から、何か冷たいものがダークネスの体の中に入り込んでいた。

ヒュウの霊体が、生徒会書記からダークネスの中へと移動する。
抜け殻になった生徒会書記の体が、どさりと音を立ててその場に転がった。完全に昏睡しており、意識はない。
一方、ダークネスは焦点の定まらない様子の目でぼーっとしていたが、ふとその目の焦点が合う。
そして、自分の両手を見下ろした。
「……憑依、出来ちゃったよ」
ダークネスの声で、憑依怪人ヒュウが発言する。
憑依怪人と呼ばれるほど、憑依に特化した力の持ち主であるヒュウだが、実は魔法少女に憑依できたことはいままで一度もなかった。
魔法少女は聖なる力に守られており、憑依の力は弾かれてしまう。
何度か完全に気絶した魔法少女などにも試したのだが、意識がなくともあっさり弾かれ、危うくヒュウの霊体が散り散りになりそうになったものだった。
しかし今回、ダメ元で行ったダークネスへの憑依は、恐ろしいほどスムーズに成し遂げられていた。
「なんで成功した……？　他の魔法少女に憑依できなくて、最強の魔法少女に憑依できる理由ってなんだ……？」
そう考えを巡らせかけたヒュウだったが、ふと自分の体を見下ろし――極上の女体を実感して、にやりと笑った。
「疑問はあるが……まずはこの手に入れた体を楽しまなきゃ損だな……！」
とてもダークネスとは思えない下品な表情を浮かべたヒュウは、まずは露出の大きいコスチュームで余計に目

立っている乳房を、両手で鷲掴みにする。

その乳の大きさは見るだけでもよくわかるほど大きかったが、触れるとまたその実感が違った。

深く刻まれた胸の谷間を強調するように乳房を揉み、その柔らかさ、大きさを堪能する。

「うーん……いい触り心地だ……弾力も申し分ないし、柔らかさも兼ね備えている……極上のおっぱいだな……」

そう呟いた後、ヒュウはコスチュームの胸部分を捲るようにして、乳房を露出させてみる。

すると、すでに固くなって尖っているピンク色の突起が露わになった。

「なんだ？　ちょっと揉んだだけで、もう固くなってやがんのか……？　こりゃあ、相当敏感な体質っぽいぞ……？」

何気なく呟きながら、ヒュウがその乳首を指先で引っ掻くと、想像以上の刺激がそこから発生した。

「んぁっ！？　な、なんだこれ……敏感すぎる、だろ……っ！」

憑依怪人として、様々な人間に憑依して来た実績のあるヒュウだが、ここまで敏感な身体には覚えがない。

それくらいダークネスの体は敏感な反応を示していた。

「あんだけ初心な反応をしといて……実はめちゃくちゃ開発しまくってるビッチだった……ってわけでもなさそうだよな……」

ぶつぶつ呟きながらもう一度乳首に触れる。

電気を流されたかのように体が反応し、快楽があっというまに広がってしまう。

乳首への刺激を一端止めて、ヒュウは他の場所にも触れ始めた。

セクシーな鎖骨、引き締まった腹回り、張りのあるヒップ、滑らかな太腿や二の腕、そして――ぴっちりと閉じた性器。

性感帯となり得る場所や、性器そのものに触れたヒュウは、ダークネスの身体の特徴を大体掴んでいた。

「なるほどな……こりゃあ、とんでもない素質を持ってそうだぜ」

ダークネスの体はどこに触れても敏感に反応していた。

それは感度が極めて高く、淫乱な体質であることを示している。その気になれば鎖骨でイケてしまいそうなほどだ。

だが、それと同時に、ダークネス自身はその体に一切性的な意味で触れていないことにも気づいた。

性交の経験はもちろんなく、恐らくは自慰すらしたことがないだろう。

「こいつは……開発するのが楽しみだ……！」

素質だけでも淫乱であることがわかるほどの敏感さなのに、そこからさらに開発し、鍛え上げたらどうなってしまうのか。

ヒュウはいまからその最高の快感を味わう時のことを考え、涎が出そうなほど楽しみになっていた。

「とりあえず……最初の絶頂くらいは、性器で味合わせてやるか」

嬉々として自慰を始める。

先程生徒会書記の体でやっていたように、路地裏の壁に背中を預け、股を開く形でしゃがみ込みながら股間を弄り始める。

コスチュームの股間部分を脇にずらし、タイツ越しに性器を弄り始めた。

弄り始めてすぐ、タイツが湿るほどの愛液が内側から溢れ出した。まだ性器の上からその溝をなぞっているだけにも関わらず、ダークネスの性器は敏感に反応しているのだ。

「くくっ……早く中に入れて欲しいってか……？　全く、大した淫乱マンコだぜ……！」



クリトリスを刺激するために、親指の腹でその辺りを擦ると、ヒュウの想像以上の快感が股間から走り、腰が勝手に前後に痙攣する。

その快感を抑え込みながら、ヒュウはタイツごと押し込むように、指先を性器の中へと入れる。

「うお……っ！　まだ入り口でしかねえのに……！」

ほんの入り口でしかないにも関わらず、その反応はすさまじいものだった。

挿入した指先がきゅうと締め付けられ――激しく腰が暴れ、痙攣する。

絶頂の快感が全身を駆け巡った。

「ふぅ……」

ヒュウが絶頂の余韻を感じていると、彼は自分の力がダークネスの魂に沁み込むような、心地よい感覚がした。

その感覚に浸っていると、急激にダークネスの体の中で魔力が膨張する。

「んぁっ、や、ばっ……！」

余韻に浸って油断していたヒュウの霊体が、ダークネスの体からはじき出される。

「ぐっ……！　しまった……！」

憑依が解除されてしまったヒュウは慌てて逃げようとしたが、ダークネスの動きがない。

恐る恐る様子を窺うと、ダークネスは路地裏の壁に体を預けたまま、気を失っていた。

魔法少女の変身が解除され、近くで倒れている生徒会書記と同じ制服姿になる。

大きく股を開いているため、制服のスカートが捲りあがり、ショーツに包まれた股間が露わになっていた。

あられもない格好を直すこともせず、ぐったりと脱力している。
どうやら危険はなさそうだと感じたヒュウは、胸を撫で下ろす。
「ふぅ……なんとかなったか……しかし……なんでこいつには憑依できたんだ……？」
絶頂を経験したあと特有の、冴えた頭でヒュウは考える。
魔法少女には憑依できないというのが、彼の認識だったが、ダークネスには憑依が出来た。
そもそも他の魔法少女に憑依できない理由は、魔法少女たちが持つ聖なる光の力の影響だ。
闇の魔力はその魔力と相性が悪く、憑依といった力は特に聖なる力に弱い。
だが、魔法少女にも個体差は存在する。
「こいつはダークネス……光の力というには、闇よりの力……もしかして、素質自体は聖なるものより闇のものの方が強いんじゃないか？」
何かを破壊する、突破するという意味でいうならば、ダークネスの力は魔法少女の中でも随一だ。
それは何かを癒す・守るという傾向の強い、聖なる力とは対極に位置する力である。
最強の魔法少女だからこそ、闇の魔力に対する抵抗力は人一倍弱いのではないか――ヒュウはそう推測した。
「絶頂させた時、俺の魔力が一層深く浸透する感じがしていたな……これを繰り返せば、完全に支配出来るようになるんじゃないか？」
魔法少女に憑依してその力を振るえたらどんなにいいか。
常日頃からそんなことを妄想していたヒュウは、最強の魔法少女を完全な支配下に置いた時のことを夢想し―

―その顔を邪悪な笑みに歪めるのだった。

気を失ったダークネス――月奈は、まだ目覚めない。

◆第二話　女の身体

憑依怪人ヒュウを倒した翌日、月奈（るな）はいつものように学校を終え、自分の家に帰宅していた。

ポケットの中から鍵を取り出し、玄関ドアの鍵を開け、中に入る。家はそれなりに広い家だったが、中からは人の気配というものがしない。まだモデルルームの方が温かみがあるように感じた。

その家の様子に一抹の寂しさを感じつつ、月奈は微かに痛む頭を抱えた。

（やっぱり、昨日の記憶がいまいちハッキリしない……あの子は、大丈夫そうだったけれど……）

憑依怪人に襲われていた生徒会書記のことを思い出す月奈。

あられもない格好で、胸と股間を弄っている女子の姿が脳裏をよぎり、月奈はその顔を赤くした。

（ダメダメっ！　彼女は怪人に憑依されてたんだから……！　忘れなきゃ……！）

脳裏に浮かんだイメージを打ち消すべく、頭を左右に振った。

彼女に憑依してそんな破廉恥な行動を取らせていたヒュウは、首尾よく撃退したはずだった。

生徒会書記がそのことをトラウマに感じないよう、記憶を操作して家に帰したことも、朧気に覚えている。

実際この日月奈が学校で会った生徒会書記は、いつもと変わらぬ地味な様子で、何の異常もなかったはずだった。

だが何かが月奈の頭に引っかかっている。

その違和感を探ろうとして、昨日のことを思い出そうとすると、生徒会書記の痴態ばかりが思い返されてしま

い、上手く行かない。

（私には刺激が強すぎたのかしら……忘れなきゃ……）

「はぁ……」

溜息を吐きながら、玄関で靴を脱いだ月奈はリビングに移動する。

リビングには家族間で伝言板として使っているホワイトボードがある。

そこには月奈の母親から『夕食は冷蔵庫の中にあります。荷物が届いたので部屋の前に置きました』と几帳面そうな字でメッセージが書かれていた。

家族の間に残すメッセージとしてはあまりに固く、温かみが感じられない事務的な言葉。

夕食を準備してもらえているだけありがたいということはわかっていたが、ここ数年、月奈は両親と食卓を囲んだ記憶すらなかった。

そのことを自覚した月奈は、ずんと重いものが心にかかるのを感じる。

両親が健在にも関わらず、孤独を感じてしまう自分は、贅沢者だと自嘲した。

（大丈夫……今は、聖羅がいるから、大丈夫）

例え家族の暖かさは得られずとも――親友であり、戦いのパートナーでもある聖羅がいてくれれば自分は大丈夫だと。

それは半ば言い聞かせているような状態だったが、月奈はそう信じていた。

月奈は自分の部屋に向かい、伝言版の通りにその部屋の前に荷物が置かれているのを見つけた。

「……そういえば、荷物ってなんの荷物かしら。別に何かを頼んでたりはしていないはずだけど……？」

ひとまず部屋の中にその荷物を運び入れる。

彼女が抱えられる程度の大きさをしたその箱には、何かがぎっしり詰まっているような感触がした。

送り主の名前も書いていない。

本来であれば、その時点で警戒するべきだった。少なくとも魔法少女として活動している月奈には、危険なものを送りつけて来る組織に心当たりがあるのだから。

だが、なぜか月奈は送り主が不明ということを気にすることなく、何気ない調子でその箱を開けてしまう。

その目に飛び込んで来たのは——たくさんのアダルトグッズだった。

ローターにバイブ、乳首やクリトリスを吸引するためキャップや、浣腸をするためのエネマシリンジと言われる道具。

手枷足枷や、ボディハーネスなど、多種多様なアダルトグッズが詰め込まれていた。

月奈は一瞬そのグッズの意味がよくわからず、蓋を開けた状態で呆けてしまう。

だが一番上に置かれた、リアルな男性器をモチーフにしたバイブがごろりと転がると——それらの道具の用途を察し、慌てて蓋を勢いよく占める。

月奈の心臓がドクドクと激しく高鳴っており、彼女の顔は茹でたように真っ赤になっていた。

「なっ、なっ、なっ、なんでこんなものが送られてくるのよっ！？」

誰とも知れない送り主に対して憤慨する月奈。

それは恥ずかしい感情を誤魔化すための、八つ当たりのような感情だった。

そんな月奈の脳裏に、昨日見た生徒会書記の痴態が蘇る。

昨日の書記は素手であったにも関わらず、この時月奈が思い浮かべた光景は、箱の中に詰め込まれていたアダルトグッズを駆使して自慰をしている姿だ。

バイブを股間の穴に入れて前後に動かし、ボディハーネスでその体を彩り、ローターで乳首を刺激していた。

そんな光景を想像してしまった月奈は、激しく頭を横に振り、その映像を追い払う。

「と、とんでもないいたずらだわ……！　全く！　誰の仕業よ……！」

ひとまず部屋の片隅にその荷物を追いやり、その上に毛布を被せ、学校のカバンを上に置く。

箱の姿が見えなくなったことで、月奈は胸を撫で下ろした。

「はぁ……お風呂、掃除しよう……」

どっと気疲れしてしまった月奈は、そう呟いて風呂掃除へと向かう。

体を動かして、アダルトグッズの事を忘れたかったのだ。

だが、何をどうしても、月奈は事あるごとにそのことを思い出して、いやらしい気持ちになってしまった。

最初は生徒会書記の痴態が脳裏で再生されているだけだったのが、その記憶の中の書記が、徐々に月奈自身へと入れ替わっていった。

裏路地の壁に背中を預け、体を弄っている自分が、ありありと脳裏に浮かぶようになってしまった。

（違う……！　こんな、の……！）

傍から見ているなら、生徒会書記の立ち位置に自分を入れ込んだだけの妄想で済むのだが、月奈はなぜか自分で視点で自分を弄る光景をハッキリと思い浮かべてしまうようになっていた。

あまりに臨場感のある妄想に、興奮してしまう。

月奈の記憶には残っていなかったが、実際に経験した事なのだから、臨場感があるのは当然だ。

自覚はなかった月奈だが、どんどん昂っていく感情を抑えることが出来なくなる。

見えないように隠していたアダルトグッズの箱を、もう一度開いた。

その中に詰まっているアダルトグッズの山に圧倒されてしまいながらも、月奈は恐る恐るその中に手を伸ばし、一番シンプルで小さな、ピンクローターを手に取った。

（これくらい、なら……）

バイブを入れるのはさすがに躊躇われたが、ローターくらい小さいものならいいだろう、と月奈は自分に言い訳しつつ、それを持ってベッドの脇に腰を下ろした。

ベッドに背中を預けつつ、M字開脚気味に足を開いた月奈。

スカートが捲れあがり、ショーツに包まれた股間が露わになった。

（一度だけ……一度だけ、だから……っ）

月奈はそう自分に言い聞かせる。

もやもやする気持ちを晴らすため、一度絶頂してしまえばそれでいいという考えだった。
淫らな光景を思い出さないようにするためには、発散してしまうのが良いと、何かで聞いた覚えがあったのだ。
ローターを手に、まずは素手で自分の股間に触れる。
ぬるっとした感触が、ショーツの内側から伝わって来た。
「……！」
散々痴態を思い浮かべてしまっていたためか、すでに彼女の股間は濡れていたのである。
そのことを実感してしまいながら、月奈はショーツの上から自分の股間を弄る。
「く、ぅう……っ！」
じりじりとした快感が生じ、月奈は自分の腰が自分の意志とは関係なく跳ねるのを感じた。
それをなんとか堪えつつ、今度はローターを押し当てる。
ローターはコードで繋がったリモコンがあり、月奈はそのスイッチを特に何も考えずに押してしまった。
股間に押し当てていたローターが震動し、月奈の股間に刺激を与えた。
その振動自体は決して強くなかったが、初めてのローターの刺激に、月奈の体が激しく反応してしまう。
「きゃぅ……っ！　うぅ……ッ！」
ビクビクと月奈の肩が跳ね、体全体をぎゅっと縮込ませて快楽を堪える。
その身体の奥からじわじわと快感が湧き上がり、月奈は衝動的に空いた手で胸を鷲掴みにしていた。
「んっ、んぅ……っ、ふっ、んんぅ……っ！」

ローターを股間に当て、胸を揉む。

月奈の動きはとてもぎこちなく、とても拙かった。ほとんどの女性はその愛撫では気持ちよくなれないだろう。

だが、天性の淫乱体質で、かつ敏感な性質を持つ月奈は、その拙い愛撫でも強力な快感を覚えていた。

「ふあぁ……ああ……っ」

快感の余り、口から奇妙な声が出てしまう月奈。

暫くそうやって刺激を楽しんでいた月奈だったが、精神が昂るにつれて、拙い愛撫では我慢が出来なくなっていた。

（く、ぅ……っ、なんで、なの……？　もっと、もっと、気持ちよくなれる、はず、なのに……！）

記憶を失っている月奈は、憑依怪人のヒュウが与えた的確な快感のことを実感として覚えていない。

しかしその与えられた快楽のことを、月奈の体は覚えていた。月奈は無意識のうちにその時の快感を再現しようとしていたのだった。

女の体を知り尽くしたヒュウと、ほとんど初めて自慰をする月奈。

双方の手つきが違うのは当然で、たどり着ける快楽の強さも当然違ってしまっていた。

そのことを自覚できないまま、月奈はとにかくさらに強い快感を得ようと、胸を揉む力を強め、ローターをさらに強く股間に押し付ける。

「ふぐっ……！」

ローターを押し当てられた股間が、ぐちゅりといやらしい水音を立てる。

すっかり愛液を溢れさせた彼女の股間は、ショーツにシミが浮かび、その生地が股間に張り付いて、その割れ目も浮かび上がらせているほどだった。

クリトリスの主張が激しく、ショーツの上からでもその場所がわかってしまう程度には、その存在を露わにしていた。

「はーっ、はーっ、はーっ……」

息を荒くしながら、さらに強く胸を揉む。

ブラジャー越しでも感覚で乳首が固くなっていることを把握する。

この時には、月奈はすっかり自慰の虜になっており、とにかく気持ちよくなることしか頭になかった。

ローターの振動を強め、服の中に手を差し込んで直接胸を刺激する。

股間に押し当てるローターの狙いを、クリトリスに定めた。

激しく振動するローターが、月奈のクリトリスを押し潰す。

「んぎぃいっ！！」

とても気持ちよくなっているとは思えない声をあげる月奈。

クリトリスから走った衝撃が月奈の全身を駆け巡り、その快感を何倍にも増幅させて——股間から噴き出した。

「はふうううっ！？」

未知の感覚に目を白黒させて悶える月奈。

溢れ出したそれは、ショーツではとても受け止め切れず、床に滴って広がっていくほどのものになった。

失禁したわけではない。

月奈は初めてのオナニーで、あろうことか潮噴きにまで達してしまったのである。

じわじわと溢れ出した愛液の面積が広がる中、月奈はそれを気にする余裕もなく、体をベッドに預け、ぐったりとして呆然としていた。

潮を噴くほど気持ちよかったのだから、満足してもいいようなものだが、月奈の手は自然と再び秘所を弄り始めてしまう。

もっと気持ちよくなれるはず、という根拠のない思いが月奈を突き動かしていた。

「ふー……っ、う……っ、んぅう……っ、ん……っ」

激しい愛撫から一転。

じっくりと手を動かし、股間を弄り続ける。

もっともっと気持ちよくなりたいという想いだけが、月奈を突き動かしていた。

そうやって自慰を続けて、どれくらい経っただろうか。

「……っ！」

また小さな絶頂を迎えた月奈が体を震わせ——力尽きたように動かなくなる。

規模は小さくともひたすら気持ちよく成り続けた彼女は、すっかりその体力を使い果たしていた。

意識を保っていることが出来ず、あられもない格好で両足を投げ出した状態で、眠りに落ちてしまう。

こっくり、こっくりと頭が揺れ、やがて完全に寝入ってしまった。

チクタクと時計の針が進む音だけが部屋に響く。
そんな部屋の中に、するりと霊体が入って来た。
憑依怪人のヒュウだ。
「くっくっくっ……全くここまで上手く行くとはな……予想外だ」
小さく呟いたヒュウは、自慰をして力尽きている月奈を見下ろす。
ヒュウは一部始終を全て見ていた。
「ちょっと精神を掻き乱す程度の仕込みになればいいと思ったんだがな……」
アダルトグッズを送りつけたのは、ヒュウの仕業だった。
それによって心を乱しておけば、月奈が眠りについたあとの憑依が容易になるだろうと考えての仕込みだったのだ。
別にそれで何をどうしようというつもりもなかったのだが、まさか自発的に自慰までし始めるとはヒュウも思っていなかった。
「……昨晩の俺の行為が、そこまで影響を残していたのか？　それとも、元々そういう素質に長けていて、それが芽生えただけか……まあ、どちらでもいいか」
ヒュウはそう呟くと、改めて月奈の様子を観察する。
自慰で力尽きている月奈は、ショーツの中にローターを摘まんだ指を入れ、直接刺激を行っていた。胸を揉んでいた手も、服の中どころかブラジャーの下まで潜り込み、どんな言い訳をしてもオナニーの途中で寝落ちをし

た姿そのものだ。

「くくく……服を脱いでもいない辺り、まだまだ理性が気持ちよくなることの邪魔をしているようだな……」

ヒュウはそう分析すると、寝ている月奈の体に憑依する。

昨日同様、全く抵抗なくするりと月奈の中に入り込んだヒュウは、一端手を引き抜いた。

そして、その身に纏っていた服を脱いでいき、アダルトグッズの詰め込まれた箱の中から、ボンデージ衣装を取り出した。

股間や乳房を露出させながら、その部分を強調するようなデザインのそれを身に着けると、痴女としか思えない姿になる。

「うん、やっぱり似合うじゃないか。俺の見立ては完璧だったな」

露出した乳房をぷるぷる震わせつつ、ヒュウは部屋に置いてあった大きな姿見の前に立つ。

胸を突き出し、足を開いた破廉恥なポーズを取って見せる。

「ふふっ……♡　私は月奈。私立白雪女子高校に通う１８歳。エッチなことが大好きで、おまんこ弄りながら寝ちゃうのなんて、日常茶飯事なの♡」

月奈のフリをして変態じみた自己紹介を行いつつ、ヒュウは先ほど月奈も使っていたローターを手に取る。

「敏感な身体を持て余してて、いつもオナニーの事ばっかり考えてるわ♡　その証拠に……ほら♡　おまたのお豆ちゃんがこんなに大きくなっちゃってるぅ♡」

鏡の前でガニ股になり、へこへことみっともなく腰を動かしながら、ヒュウはそのクリトリスにローターを押

し付ける。

「んひゃあああっ♡　ローターで、お豆ちゃんが潰れて、しゅごい快感がっ、頭っ、痺れ……んううっ！♡おまんこから涎が垂れて……ッ、頭、おかしくなるぅっ♡」

下品な実況を交えながら、ヒュウは激しい自慰を続けた。

「あああッ♡　イクッ、イクッ、いっちゃうウウウッ！！」

あっというまに絶頂に達したヒュウは、激しく体を震わせた。

絶頂の快感が全身を駆け巡ると同時に、自分の憑依の力がさらに月奈に浸透するのを感じ取る。

余韻に浸っていると、昨日同様、月奈の魔力が膨れ上がるのを感じた。

「ん、ぐっ……！」

昨日は弾き出されてしまったが、なんとか月奈の体から離れまいと堪えるヒュウ。

昨日ほど弾き出す力は強くなく、ヒュウは辛うじて月奈の体の中に留まり続けることが出来た。

「ふぅ……ふぅ……はは っ。成功だ……！　いいぞ、確実に浸食が進んでいる……！」

さらに自慰を続けるヒュウは、アダルトグッズの中から、凶悪な形をしたディルドを取り出した。

「よし……次はこいつで……んっ」

そのディルドを口に含み、丹念に唾液を絡ませていく。

ディルドはすぐに全体がテカテカに光るようになって、怪しげな魅力を醸し出し始めていた。

それをヒュウは、自分の股間に——月奈の性器に押し当てる。

「ふーっ……」

さすがに緊張した様子で深呼吸をしたヒュウは、捻じ込むように狭い膣を割り開きながらそのディルドを押し込んでいく。

ずぶっ、とディルドの先端が僅かに膣に入り込み、溢れ出していた愛液が押し出されて零れ落ちる。

「んっ、んんっ、おまんこっ、ひろがっ、て……くぅ……！？」

さすがにキツいだろうと考えていたヒュウだが、月奈の淫乱体質は彼の想像を超えていた。

ディルドはかなり太い部類のもののはずが、ぬるぬるとした月奈の膣内はそのディルドをあっさり奥に導いていってしまったのだ。

処女の証である処女膜が僅かな抵抗を見せたものの、ヒュウがさらに力を込めると、あっさりと破けてしまう。

破瓜の痛みを感じないわけではなかったが、それ以上の快感が月奈の性器からは生じていて、鮮血もあっという間に愛液に流されてしまった。

ディルドがズブズブと呑み込まれていく。ヒュウは限界が来たら止めるつもりでいたが、その体はその予想に反してディルドを苦も無く呑み込んでいく。

「んぅうう〜〜っ！」

そして、遂に。

ディルドの先端が、子宮口に到達し、子宮全体を押し上げた。

「ぶぎぃっ！♡」

その瞬間生じた怒濤の快感は、ヒュウの意識を真っ白に塗り潰すほどの強烈なものだった。
さらに月奈の魂に自分が浸透していくのを、ヒュウは心地よく感じていた。



それから暫くして、月奈が目を覚ました。

「あ、れ……？　私……何を……？」

一瞬自分の状況を把握できていなかった月奈だが、自分の手が胸や股間を弄っていることに気付き、驚愕した。

「わ、私っ、なんて、ことを……！？」

眠りについてもなお体を弄っていたことに気付いた月奈は慌てて手を引き抜き、立ち上がって服装を整える。

僅かに下腹部に鈍痛を感じていた。

「もしかして……寝ている間に、処女を破っちゃった……とか……？」

青褪めた月奈は自分の股間を見下ろすが、そこがどうなっているのか確かめる勇気はなかった。

「ね、寝ている間も弄ってたから、よね……うん、そうよ……そうにちがいない、わ……」

ぶつぶつと自分に言い訳をするように呟きながら、月奈はひとまずシャワーを浴びるために浴室へと向かう。

月奈が必死に自分に言い聞かせているのを、ヒュウは笑みを堪えながら聞いていた。

（ふむ……体をこっちの意志で動かすことは出来ないが……憑依自体は出来ているようだな。良し良し）

満足げに頷く彼は、いまもまだ月奈の心の中に潜んでいた。

体の主導権は得られないものの、憑依した状態を続け、心の片隅に存在し続けることは出来ていた。

その事実に、ヒュウは月奈の魂を確実に浸食していけている手応えを感じるのだった。

（さあ、どんどん俺に染めていってやろう……くくく……リリィダークネスが『俺』となるのも、時間の問題だな）

邪悪にほくそ笑む存在に、月奈は全く気付いていなかった。

◆第三話　憑依浸蝕

指を膣に入れたままという、とんでもない状態で寝落ちしてしまった日の翌朝。

月奈（るな）はいつも通り制服を身に纏い、学校への道を歩きながら――下腹部の疼きを感じていた。

（うぅ……やっぱり、何か変だわ……）

異様に下腹部が疼く理由が、月奈にはわからなかった。

生理周期的にもまだ生理が始まる段階ではない。

それなのに慢性的に体が疼き、エッチな気分になってしまう。

フラッシュバックのように、ある映像が月奈の脳裏に浮かび上がっていた。

それは自分自身の姿だったが、本人の記憶と違うことがいくつもあった。

まずその自分が身に着けているのは、胸や股間が丸出しになっている、とても露出の多い服装だった。いわゆるボンデージ衣装というものだ。

送り主不明の荷物の中に入っていたのは月奈も記憶しているが、それを身に着けた覚えはない。

だというのに、その光景はまるで実際にあったことのように明確に思い浮かべることが出来てしまった。

『エッチなことが大好きで、おまんこ弄りながら寝ちゃうのなんて、日常茶飯事なの♡」

自分の声で、その映像の自分は喋る。

月奈本人が思い浮かべたこともないような淫乱な言葉を口にし、その両手で体を弄る。

その指使いの感触も、記憶にある自分で触った時の感触とは比べ物にならないほど気持ちいい。

（……っ、違う違う違う……っ、私は、こんなのじゃ、ない……っ）

そう必死に否定する月奈だったが、いつまで経っても脳裏からその映像が消えることはなく、むしろ鮮明になっていくようだった。

月奈はそんな、淫夢の白昼夢ともいえる現象に悩まされていた。

それに振り回されている月奈は、自分の股間がしっとりと濡れていることも自覚していた。

履いているショーツにまで染み込み、微かな不快感が常に彼女を襲っていた。

授業中。

普段は真面目に授業を聞いている月奈だったが、この日は全く集中できていなかった。

椅子に座ったことで、濡れたショーツが股間に張り付いてしまい、その感触が常に月奈を襲い続けているためだ。

直りかけの傷がじゅくじゅくと疼くように、月奈の股間もまた激しく疼いていた。

「……っ」

授業中に派手な動きをするわけにもいかない。

そういうわけにはいかないのだが、月奈はこっそりと股間に自分の手をやり、握っていたシャーペンのノック部分で軽く自分の割れ目をなぞった。



ショーツ越しとはいえ、刺激に飢えていた月奈の股間は、激しく反応してその愛液をさらに滲ませてしまう。

（だめ、なのに……っ）

月奈はすぐにでもやめようと手を股間から離そうとしたが、その手は意志に反して動いてくれなかった。

それどころか、もっと刺激が欲しいとばかりに、割れ目をなぞる動きを再開する。

ゾクゾクとした快感が月奈の体を駆けあがっていく。

刺激自体は、オナニーをしたときに比べれば遥かに弱い。

周りに気付かれないように触れなければならないのだから当たり前だ。

刺激するのに使用しているのがペンの頭ということもあり、ローターや指に比べてその刺激はかなり小さいものにならざるを得ない。

だが、自室というプライベートで安全な場所でするのと、授業中の教室といういつ誰に気付かれるのかわからない危険な場所でするのとでは、覚える背徳感に天と地ほどの差があった。

（周りにバレたら……っ、バレたら……っ、大変なことに、なるのに……っ）

授業中にオナニーをする変態という認識になってしまう。

いままで月奈が築き上げて来た全てが無為になり、変態として詰られ、嘲笑されてしまう。

その背徳感が、オナニーのスパイスになっていることは間違いなかった。

（ふっ……、くぅ、あっ……！　んあぁ！）

股間を突っついていたペンが、月奈のクリトリスを捉えた。

それが最後のトドメとなり――月奈は白昼堂々、他の学生たちも多く存在する教室のど真ん中で、絶頂してしまった。

股間から愛液が溢れ、潮を噴いてしまう。

月奈の座っている椅子の座面を伝い、教室の床にその愛液と潮の混じったものが滴り落ちた。

絶頂した拍子に月奈の体が震え、ガタガタと大きな音を立てる。

静まり返った教室で、その音はよく響いた。

クラス中の視線が、一挙に月奈に集中する。

「黒桐（こくとう）？　どうした？　大丈夫か？」

授業を進めていた教師が、月奈に対して声をかける。

彼は月奈が居眠りをしていたとはこれっぽっちも考えていなかった。

他の不真面目な生徒ならともかく、月奈は生徒会会長も務めているほどの真面目な生徒で、いつもきちんと授業を受けていたからだ。



教師の問いに対し、月奈はニッコリと笑みを浮かべて応える。

「……申し訳ありません。目の前に飛んで来た埃を、虫と勘違いしてしまったんです」

若干恥ずかしそうに申告する彼女の言葉を、疑う者は教室の中にいなかった。

なんだそうかとばかりに納得し、何事もなかったかのように授業に戻る。

ただ、教師だけは普段クールで澄ました表情を浮かべていることの多い月奈が、妙にいい笑顔をしていたことに僅かに疑問を抱いたが——結局、取るに足らないことだと結論づけ、そのまま授業に集中した。

一方、本人らしからぬ笑みを浮かべた月奈は、やはり月奈らしくない笑みを浮かべたまま、授業を聞くフリをしていた。

（ふぅ……くっくっくっ、順調に浸食が進んでいるようだな）

絶頂した隙を突いてヒュウが体の主導権を奪い取っていたのだ。

月奈の意識は心の奥に押し込められ、自分が現在どうなっているかも認識出来ていない。

感覚的に暫くその状態が続くことを確信したヒュウは、月奈のフリをし続けることにした。

授業時間が終わった放課後。

生徒会室の前に、生徒会の書記——近江真央（このえまお）がやって来た。

彼女は地味で目立たないことを自覚していたが、今はその胸が無性に高鳴っている。

生徒会長である黒桐月奈（こくとうるな）に呼び出されていたからだ。

一体何の用だろうかと緊張しつつも、憧れの月奈と対面し、一対一で話すことが出来ることを光栄に感じていた。

「いけないいけない……落ち着いて……」

にやついてしまいそうになる頬を摩り、心を落ち着かせるために深呼吸。

そして、意を決し、ドアをノックして中へと入る。

「失礼します……」

生徒会室には、すでに月奈が待っていた。

真央の顔を見ると、その表情を綻ばせる。

「よく来てくれたわ。近江（このえ）さん」

妙に柔らかい笑みを向けられて、真央はせっかく落ち着かせた心臓が高鳴るのを感じた。

慌てて咳ばらいをして気持ちを落ち着けつつ、月奈の傍に近付く。

「何の御用ですか？　次の全校集会でのスピーチ原稿に何か不備でも……？」

自分が月奈に呼び出されるのなら、生徒会の仕事に関することだろうと考えたらしく、思い当たることを口にする真央。

だがそんな彼女の言葉を遮るように、月奈がその真央の腕を引き、自分の傍に抱き寄せた。

「か、かか、会長！？」

アイドルもかくやというほど整った月奈（るな）の顔が真央（まお）の目の前にある。

まつ毛の長さすら実感できるほどの至近距離に顔が近づけられていた。

間近にした月奈の顔を真央が「相変わらず美しい」と思った次の瞬間――月奈（るな）がその唇を真央のそれに重ねて来た。

「！？！？」

突然のキス。

その衝撃に真央の思考は千々に乱れてしまう。

確かに真央は月奈に対して憧れの感情を抱いていた。

同性愛にあまり抵抗がなかった彼女は、実際にそういう性的指向を持っているかはさておき、男性よりも凛々しく格好いい月奈にそうされることを夢想したこともある。

だがそれはあくまで妄想であり空想で、実際にそうされるとは露ほども考えていなかった。

「んっ、んぅ……ッ！」

「ん……ふっ、ふふっ……」

藻掻く真央に対し、月奈は微かに笑って見せた。

戸惑いながらもそれを受け入れるしかない真央に対し、月奈はしっかりと体を抱きしめたまま、舌を差し込んで来ようとする。

「ふぁっ！？　だ、ダメッ……！」

いきなりのディープキスに戸惑い、抵抗を見せる真央。
顔を逸らそうとしたが、月奈の手が真央の顔に添えられ、優しく月奈の方へと向け直される。
「ダメなのかしら？　私とこういうこと……したくない？」
甘い声音で囁く月奈。真央は心と体が震えるのを感じた。
「だ、だって、でも……わ、わたし……っ」
「いいのよ……素直になって……全部私に任せて……」
あまりに甘く蕩けるような囁きに、真央の抵抗力は徐々にそぎ落とされていった。
元々、抵抗しようという気持ち自体、あまり湧いていなかったところに、そんな甘い言葉を囁きかけられては、どうしようもない。
再び二人の唇が重ねられ、口の中まで挿し込まれる舌の感触に真央は打ち震える。
「んんぅ……ッ！　――んぅっ！？」
「ふふっ、すべすべで、いい肌してるじゃない……」
ディープキスを続けながら、月奈の手が真央の制服の中に滑り込んで来ていた。
太ももの後ろ側という、普通に過ごしていれば他の人に触られることなどほとんどない場所を、月奈の手が摩っている。
身体を抱き締めていた手も、裾から中へ滑り込んで来て、無防備な背中を掌で直に撫でられる。
「んんんっっ！！」

気持ち良さが湧き上がって来て、真央は翻弄されていた。

ディープキスによって呼吸が上手く出来ず、頭がぼーっとし始めたのも、それに拍車をかける。

もういいや、という諦観の気持ちが真央を包み、その身を月奈に委ねてしまう。

身を委ねて刺激を与えられるがままにしていると、与えられる快感は余計に高まり、真央はより深く月奈にその身を委ねていく。

いつしか真央は、服を開けさせられ、代々生徒会長が使っている机の上に押し倒されていた。

伝統のある場所でこんなことをしてはいけないと頭では思うのに、快感に痺れた頭と体では抵抗らしい抵抗も出来ない。

「あっ、あっ、あっ……んっ、ああっ、あっ♡」

月奈の指が膣を掻き乱すのに合わせて、喘ぎ声を上げることしかできていなかった。

そんな彼女に覆いかぶさるようにして、半裸の月奈がその体を重ねて来る。

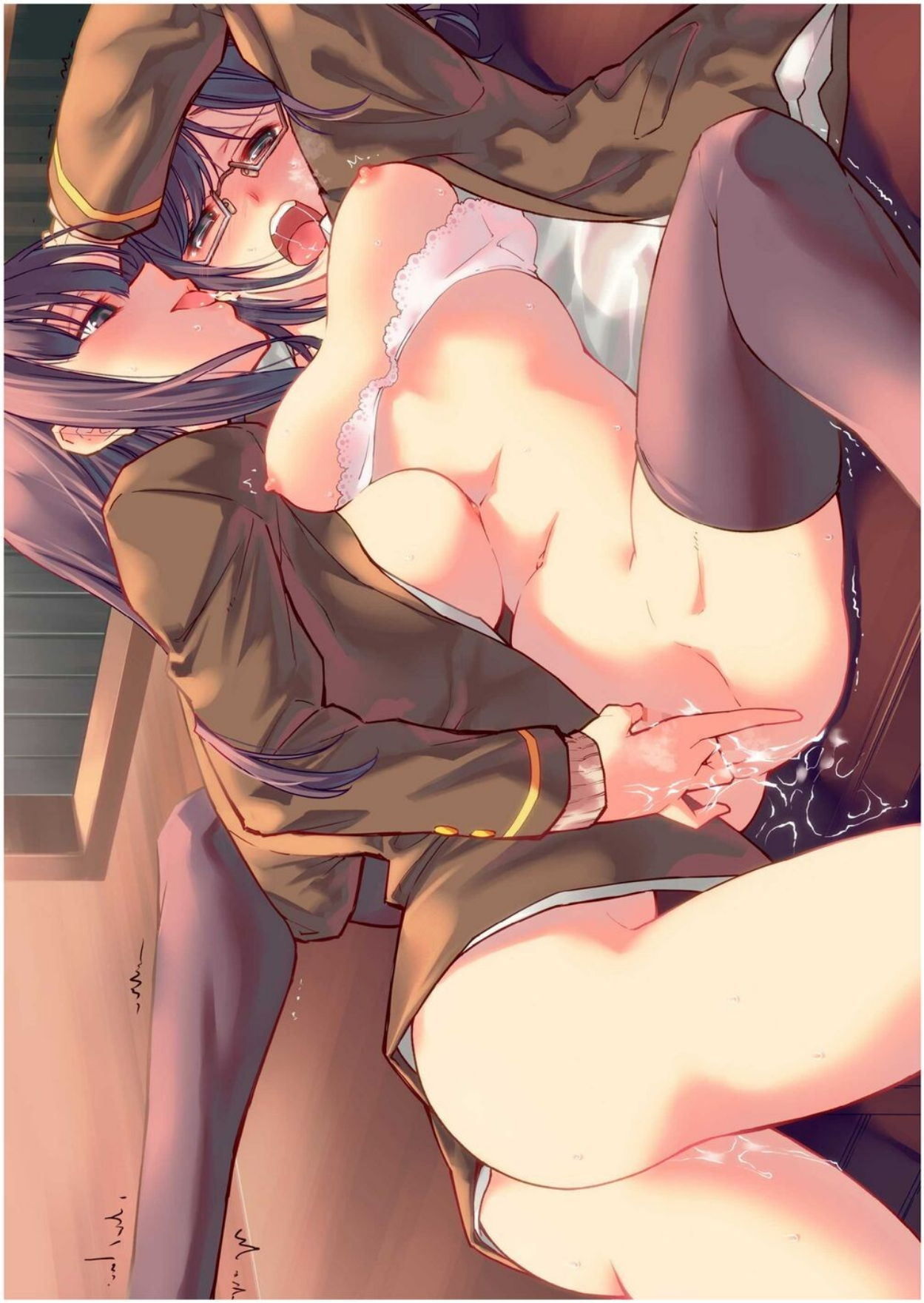
胸と胸が押し付け合わされ、擦れ合って快感を生み出す。

「さあ……いくわよ」

月奈は自分の指先を丹念に舐め、唾液を絡ませると、その指を真央の股間に滑り込ませた。

「ひゃぅっ！」

真央の性器はそれまでの愛撫ですっかり濡れてしまっていたため、月奈が唾液を塗すまでもなく、あっさりその指を受け入れてしまう。



「……っ！　……っ、あ、れ……？」

体の中に指が入ってくる感触に身を震わせた真央だが、その感触に妙な感覚を覚える。

正確には、違和感がないことに違和感を覚えていた。

「あれ……？　わたし……処女、のはず……なのに……」

二人の通っているのは女子高であるため、男子との出会いがそもそも少ない。

また不順異性交遊を禁じているため、ほとんどの生徒は処女であり、経験などほとんど持っていないのである。

だが、月奈の指がどれほど深く入って来ても、真央は痛み一つ覚えなかった。

それ自体はまだ個性という範疇で説明がつく。初めての挿入でも痛みを感じないというものは一定数いるため、たまたま自分がそうであると考えれば自然だからだ。

だが、真央の場合は、そもそも痛みや違和感を覚えるどころか、むしろ挿入されている状態が心地よく感じてしまっていた。

自分の体の状態を不思議がる真央を、月奈はさらに激しく責め始める。

「か、会長……っ、なんだか、わたし、変、ですぅっ……！」

戸惑いをそのまま口にする真央に対し、月奈はニヤリと彼女らしからぬ笑い方で、笑った。

「ふふ……大丈夫。もうそろそろ、わかるはずだから……」

「それ、って、どうい……んいいいいっ！？」

びくんっ、と真央の体が激しく跳ねた。

膣内に挿入した月奈の指が、その膣壁を引っ掻くように動いたのだ。
結果、真央は激しい快感に悶えることとなり――頭の中を覆い隠していた影が晴れていくような感覚がした。
「あ……」
激しい絶頂と共に、覆い隠されていた記憶が溢れ出す。
数日前、街を歩いていたところ、何かが体に入り込んで来て、自分の体が動かせなくなったことを。
そのまま裏路地に入って、ひたすら自慰をし続けたことを。
その時に処女は喪失し、都合のいい体に作り変えられてしまったことを。
この世ならざる快楽と引き換えに、自分の中に入って来た怪人――ヒュウの奴隷となることを誓わされていたことを。
全て、思い出した。
そして真央の主人であるヒュウの気配が目の前の月奈からすることにも、気付いた。
「ヒュウ、様……？」
「やっと思い出したか」
月奈の顔で、ニヤニヤと笑うヒュウ。
「ダークネスの記憶操作は中々手ごわかったな……きっちり俺の影響だけを綺麗に塗り潰しやがって」
忌々し気に呟くヒュウ。
だが一度思い出してしまえば、もはや記憶操作は何の意味も成さない。

「おら、やるぞ。やれる限り、やれるだけ、な……」

そう言いながら、ヒュウは真央の足を割り開くと、その股間を覆っていたショーツを引き千切って脱がす。

同時に真央も、月奈の体が身に着けていた下半身の衣類を脱がした。

真央の下半身を机の上から少しはみ出る位置に移動させると、その股を大きく開かせ、互いの性器を擦り合わせた。

いわゆる貝合わせという行為だ。

真央も月奈もその膣から激しく愛液を垂らしていた。

大陰唇は柔らかく盛り上がり、打ち付け合うことで挿入とはまた違った快感を生み出している。

二人の股間が激しく打ち合わされ、二人分の嬌声が生徒会室に響き渡った。

「んあっ、あっ、んっ、あああっ！」

ぐちゅ、ぐちゅっ、と濡れた性器同士が激しく打ち合わされ、その周りに愛液を飛び散らかす。

打ち付けると同時に擦り付けるなどして、より強い快感を生み出した。

結果、二人は激しく絶頂し会い、飛び散った汗や愛液で生徒会室が酷く汚れて行った。

それから下校時刻を告げるチャイムが鳴るまで、二人はたっぷりとレズセックスを楽しんだ。

ふらふらになりながらも、月奈は立ち上がり、身支度を整える。

「不自然じゃない程度に部屋を片付けておけ、いいな？　真央」

そのヒュウの命令に、床の上でお尻を突き出した体勢で悶えている真央は、お尻を震わせることで応えた。

散々ヒュウによって責められ続けた彼女は、全身の水分を噴出してしまったのではないかというくらいに乱れ切り、その周りの床の状態は悲惨の一言であった。

「あとそれと……家に帰ったらオナニーをして、自分でも性感帯を開発するように。理想は触れただけで絶頂し、潮を噴いて気絶するくらいの開発度だ」

もちろんそんなところまで開発してしまえば、日常生活を送ることも困難になることは想像に難くなかったが、ヒュウの知ったことではない。

素直に命令を受け入れる真央の尻を最後に軽く叩き、月奈は生徒会室を後にする。

下校し、家までたどり着いたヒュウは、手がぷるぷると震え始めるのをようやく感じた。

その手の震えは、主導権を握り続けることが可能な時間が限界を訪れたことを示していた。

「ふむ……そろそろ限界か。まあ、これだけ主導権を握れる時間が増えれば十分か」

そう嘯いたヒュウはソファに座り、月奈に主導権を明け渡す準備をする。

心を静め、現在持っている主導権をあっさり手放す。

すると、月奈が数時間ぶりに目を覚ます。

「……あ、れ？　なんで、家……？　私、授業を受けてたんじゃ……？」

さすがに唐突すぎる変化だったため、不思議そうに首を傾げてしまう月奈。

だがその疑問に感じた感情も、徐々に失われていく。

「疲れてるの、かしら……」

ふるふると頭を振り、溜息を吐く月奈。

冷静に考えれば、疲れが溜まっているだとかそんなことで流していいレベルの状況ではないのだが、月奈はなぜかそれで納得してしまっていた。

着実にヒュウの影響が深刻化している証だった。

（よしよし……次の段階へと進むとするか……）

月奈の心の中に巣食ったヒュウは、獲物がどんどん弱っていっている実感を覚え、楽し気に笑っていた。

◆第四話　快楽汚染

月奈（るな）の自室に、小さな駆動音が鳴り響いていた。

ベッドの上に寝転がった月奈が、ガニ股気味に大きく足を開き、その股間には突き刺さったバイブが飛び出していた。

そのバイブを手で掴み、激しく前後に動かして膣に刺激を与える。

月奈のオナニーの激しさは増すばかりだった。

ベッドを毎度汚すのも面倒だと悟ってからは、あらかじめマットを敷いて起き、その上でオナニーをするようになっていた。

月奈のオナニーは、着実に洗練されていっていた。

「んっ、くっ……んっ、んあ、ふあああっ！」

激しい手の動きに従って、月奈の体も激しく跳ねた。

ピンと伸ばした足が反り返り、今にも絶頂しそうなことがその表情からもわかる。

そしてついに、激しく絶頂しようとしたところで――スマホが鳴り響いた。

突然の音に、月奈は絶頂寸前だった快感が霧散するのを感じる。

むぅ、と顔を顰めた月奈は、スマホを手に取り、内容を確認する。

セイントの輪から、ネビリムの戦闘員の討伐指令が送られて来ていた。

すでに戦闘員たちは暴れているらしく、一般市民が犠牲になっているとのことだった。

普段であれば、連絡を受けるや否やリリィダークネスに変身して飛び出していく月奈だが、この時、その報告を見た月奈が感じたのは、「オナニーを邪魔されたことに対する怒り」だった。

「ちっ」

彼女の苛立ちは、そのまま舌打ちという形で現れる。

それを自覚した月奈は、目を見開いて固まった。

（いま、私……何を考えたの……？　いま、この瞬間にも罪なき人たちが犠牲になっているかもしれないのに……！）

どうして自分がそんなことを考えてしまったのか、月奈は自分の思考が信じられなかった。

慌ててダークネスに変身する。

「いっ、急がなきゃ……！」

信じられないことを考えた自分の思考を振り切るように、ダークネスに変身した月奈は戦闘員たちが暴れている場所に向かって全速力で向かう。

ダークネスが現地に辿り着いた時――そこは乱交パーティのような状態になっていた。

人型の戦闘員たちが、一般市民を捕まえて、無理矢理犯している。

若い女性たちが餌食となった様子で、ダークネスの通う白雪女子高の生徒も数人巻き込まれているようだった。

「許せない……！」

正義感を燃やし、その中に飛び込んでいくダークネス。

「ネビリムの残党たち！　そこまでよ！」

「むっ……！　貴様は……リリィダークネス！　我々の繁栄の邪魔をするな！」

戦闘員がダークネスに飛び掛かるが、それをダークネスは軽くいなして投げ飛ばす。

その一度の接触で、ダークネスは戦闘員たちの戦闘力が取るに足らないものであることを悟った。

（簡単に一掃できるけれど……問題は、一般市民よね……）

ダークネスが現れてもまだ、レイプを続けている戦闘員が何人も存在していた。

下手にダークネスが魔法少女としての力で戦闘員を一掃しようとすると、犯されている彼女たちまで一緒に潰してしまう危険があった。

戦闘員は闇の魔力によって強化がされているため、まだ丈夫だが一般市民はそうはいかない。

ダークネスの手や足が掠めるだけでも大変なことになる危険がある。

（だとすると、やっぱり一体ずつ地道に倒していく、しか……）

どう対処したものか考えつつ、周りを見渡していたダークネスは、戦闘員たちに犯されている女性達の姿に目を奪われていた。

無論彼女たちは無理矢理犯されているのだから、普通なら気持ちよくなれるはずがない。

だが戦闘員たちは雑魚であっても闇の魔力を多かれ少なかれ宿している。

その戦闘員たちと接触することによって、彼女たちは一時的に理性を失い、本能に忠実な淫乱な存在へと成り果てていた。

だから犯されているにも関わらず、積極的に股を開いたり、戦闘員のものを積極的に咥えたりして、奉仕している者がいる。

そんな本来の意志を捻じ曲げられている女性たちの姿を見て、ダークネスは無性にそれを羨ましく感じてしまっていた。

そんなことを思ってはいけないと頭ではわかっているのに、心が言うことを聞かない。

（私も、彼女たちみたいに――）

なりたい。

そんな気持ちは、致命的な隙となった。

背後から飛び掛かって来た戦闘員に、羽交い絞めにされてしまう。

「くっ……！？　し、しまった……っ！」

咄嗟に抵抗しようとしたが、脇に腕がしっかり挿し込まれて固定されてしまい、全く腕が自由に動かせない。

「いまだっ！　お前たち、やれ！」

そんな状態のダークネスに、他の戦闘員たちが襲い掛かる。

殴られたり蹴られたりする衝撃を覚悟したダークネスだったが――戦闘員たちはそんな直接的な暴力を振るわ

なかった。

その乳房が、それぞれ別の戦闘員によって掴まれ、全く違う動きによって揉みしだかれる。

「ふあっ！？　ひゃんっ！」

股間にも二人分の手が襲い掛かり、その大陰唇を左右に引っ張ってその膣の入口を露わにした。

両足にそれぞれ戦闘員がしがみつき、重しになると同時に太腿や脹脛、足の裏などを撫で摩って刺激し、気持ちよくさせていく。

そして股間には正面と背後から一人ずつ戦闘員が張り付き、膣と肛門を同時に舐めて刺激し始めていた。

「んひいいいいっ！」

いまだかつてない刺激が連続で襲い掛かって来て、まんまと彼女は翻弄されてしまう。

力を込めて戦闘員たちを振り払わなければと思うものの、体が上手く動かせない。

「うぁっ、あああっ、ダメっ、だめぇっ！」

必死に首を横に振って抵抗するダークネスだったが、戦闘員たちは戦闘力こそ大したことがないものの、女性の体に対する責めは完璧だった。

足に力を入れようとすると、足の上で器用に刺激し、笑わせて力を抜けさせる。

腕で振り払おうとすれば、乳房を揉んでいる手で直接乳房を揉み、乳首を指の腹で押し潰して快感を与えてくる。

臍にも指が纏わりつき、その刺激にさえ、ダークネスは快感を覚えてしまっていた。

（く、ぅう……っ！　これは……だめっ……こんなの、耐えられな……い……ッ♡）

異様に快感を覚えてしまったダークネスの体から力が抜けていく。

抵抗が弱まったその瞬間を狙っていた、と言わんばかりに、股間に張り付いていた戦闘員が、その舌を伸ばしてダークネスの膣内に潜り込ませていく。

バイブより遥かに細い戦闘員の舌だが、ダークネスはその舌に絶頂させられてしまった。

ぬるぬるした舌の感触が体の中を突き進み、そのまま全身へと広がる。

「あうううっ！♡　んっ！♡　んあううっ！？♡」

絶頂した彼女の体は、その快楽を全身へと伝播させていき――唐突に、異様なものが染み込んでくるのを感じた。

（なに、これっ……！　禍々しい、なにか、が……っ）

身体にだけではない。ダークネスの胸の内、魂とも言うべきものにも、何か怪しげな感触のものが染み込んで来る。

身体から力が抜け、そして、不思議なことが起こった。

ダークネスが何もしていないのに、戦闘員たちが自然と月奈から離れていったのだ。

いままで強い力で自分の体を押さえつけていた戦闘員たちが自ら離れて行くことに、ダークネスは戸惑ったが、同時にこれはチャンスだとも感じた。

（いまなら一般人も巻き込まなくていい……！　ここで、決められれば……！）

そう思って戦闘員たちを薙ぎ払おうとする。

しかし本人の意志に反し、彼女の体は全く動いてくれなかった。

（……？　なにか、おかしい……？）

最初は絶頂の余韻で動けないのかと思ったダークネスだったが、それにしては妙なことに気付く。

本当に全く、ぴくりとも動かせないならまだしも――彼女の体は勝手に動いていたのだ。

（あ、あれ……っ、なんで……！？）

自分で自分の体が動かせない異常事態に、彼女は動揺していた。

そんなダークネスに対し、戦闘員たちが声をかけて来る。

「急に大人しくなったな？」

「そんな呆けるほど、俺たちの愛撫は気持ちよかったのか？」

戦闘員たちもダークネスの変化に気付いたらしい。

抵抗する様子が無くなったため、いったん離れて様子を窺っていたのだ。

（そんなわけないでしょ！）

憤慨したダークネスが、そんな戦闘員たちに対して口を開く。

「ええ、とっても刺激的だったわ……♡」

（え？）

ダークネスは自分の口が妙なことを口走ったことに、内心驚愕していた。

そんな彼女の体は、その意志に関わらず、勝手に動き続けていく。

「でも舌だけじゃ足りないわ……もっと、逞しいものが欲しいわね♡」

（なに、言ってるの？）

ダークネス本人が戸惑う中、彼女の体はそのコスチュームの股間部分の布をずらし、戦闘員たちに向けてその性器を露わにする。

「あなたたちのそのぶっとくて逞しいおチンポを、私の雑魚マンコにブッ刺して、ぐちゃぐちゃにかき混ぜて欲しいの♡」

ガニ股になって股間が良く見えるようにし、煽情的に腰を振って戦闘員たちを誘う。

戦闘員たちはダークネスのあまりの急変に驚いていたが、それ以上に驚愕したのはダークネス本人だ。

（いやあああ！？　何言ってるの！？　やめてッ、みちゃダメッ！　見ないでッ！）

自分から曝け出しているにも関わらず、「見ないで」とはあまりにもちぐはぐな話だが、ダークネスとしてはそう叫ぶしかなかった。

身体はちっとも自分の思う通りに動かず、戦闘員たちを誘って腰を振っている。

ダークネスの突然の変わりように戦闘員たちも戸惑っていたが、やがてその表情を笑みに歪めた。

「ここまで情熱的に誘われて、断るってのはネビリム様の教えに反するよなぁ？」

「ああ、その通りだぜ。犯して欲しいっていう女がいるなら……思い切り犯してやるのが筋ってもんよ！」

戦闘員たちは一斉にダークネスに群がり、犯し始める。

戦闘員のペニスがダークネスの膣に挿入され、抉るように突き上げる。

「ンあぁッ♡」

（ひぎぃっ！）

身体が受け取る感覚は、当然心のダークネスも感じている。

ダークネスは体の中に入り込んで来るものの生々しい感覚に、目を瞬かせて呻いていた。

一方の体は、それが気持ちよくて堪らないとばかりに、体を捩って悶える。

彼女の痴態に興奮したのか、戦闘員の一人がダークネスの頭を掴んで、無理矢理頭を下げさせた。

「おい！　口でも相手しろ！」

「ああんっ、焦らないで♡　ちゃんと相手してあげるから……♡」

そう告げると、言葉通り口を使ってその戦闘員のペニスをしゃぶり始める。

（うぅっ、気持ち悪い……っ、ひどい、臭い……ッ）

当然ダークネス自身は口内に生じる感覚や、漂ってくる臭いに悶絶するが、その感情は体には反映されない。

むしろ体の方はその臭いや味をわざとらしく堪能していた。

「んじゅっ……♡　んぅぅ♡　んじゅるっ♡」

舌を突き出し、ペニスを丹念に舐る。

亀頭だけを口に含んだかと思うと、ひょっとこ口になるのも構わず、思い切り吸いながら首を上下に動かし、搾り取ろうというかのように刺激を加えた。



（うぅうう……っ！）

口の中に異様な味が広がるのをダークネスは感じた。

ペニスの先端から先走り液が滲み出し、その味が口の中に広がっていっていた。

口内がその臭いに侵されていくような、そんな感覚に振り回されるダークネス。

心はともかく、体は相変わらず熟練の娼婦のように、膣でペニスを締め付けつつ、口での奉仕も忘れない。

そんなダークネスを見ていた他の戦闘員たちも、ダークネスへと群がり始める。

「早く代われよっ」

「後が使えてんだぞ！」

ダークネスを犯そうとする順番待ちで醜い争いを産まれ始める。

一般人であればいくらでも犯せるにも関わらず、戦闘員たちはダークネスを犯そうと必死だった。

ダークネスの体は、そんな戦闘員たちを宥めるように、全身を使えるだけ使って戦闘員たちの相手を始める。

両手でそれぞれ別のペニスを掴み、扱き上げる。

いわゆる手コキという行為を、左右同時に行っていた。

パイズリがしたいという戦闘員に、胸を突き出して使わせもした。

髪の毛コキをしたいという要望や、脇の下や太腿で挟んで欲しいという要望にも、躊躇なく応えていく。

それぞれのところで戦闘員たちは射精に至り、噴き出した精液は全てダークネスの体にかけていった。

ダークネスの体はあっという間に精液で汚れて行き、顔などにぶっかけられた結果、艶やかな黒髪が白濁液で白く汚されて行っていた。

彼女の全身からは生臭い精液の臭いが立ち昇るようになり、それはダークネス本人にも自覚できるほどの臭いになっていった。

頭がくらくらするほどの生臭い臭いに、ダークネスの意識が揺さぶられる。

（ダメ……ッ、こんなの、ダメ、なのに……ッ）

ダークネスの理性は、辛うじて踏みとどまろうとしていたのだが、体が感じる快感の勢いはそんな彼女の理性をあっという間に融かしていった。

喉の奥に突き入れられたペニスが、精液をダークネスの中に容赦なく吐き出す。

大量の精液で体の中が満たされていくのを、ダークネスは自覚し――その感覚に体を打ち震わせた。絶頂してしまったのだ。

「ふぐぅ……ッ！」

絶頂する度に、心の深いところが犯されていく感覚があった。

取り返しのつかない黒いシミが広がって、ダークネスの心を塗り替えていく。

（ふぐうぅううっっ！！）

じわじわ染み込んで来る感触さえ、今のダークネスには快感に感じられてしまう。

何度も何度も簡単に絶頂してしまい、魂が汚染されていくのがわかる。

「うぅ……！　あぅううっ……！」

ビクビクッ、とダークネスの体が震えた。

苦し気なその様子を見た戦闘員たちが、ダークネスを嘲笑する。

「おやおやぁ？　さすがのお前もそろそろ限界かぁ？」

「こんだけ犯されて気を失ってないだけ褒めてやるよ」

「でもまだまだ……俺たちは満足してねぇぞ？」

戦闘員が交代し、再び膣に元気いっぱいのペニスが挿入される。

「ああんっ！♡」

「おっ、まだまだ締め付けてくるじゃねえか！」

「もっ、と……ぉ♡」

ダークネスは自然とそう呟いていた。

「もっと、もっとして♡　私のおまんこ……思いっきり突いて♡」

この時、ダークネスの体と心は一致していた。

それまでのように体が勝手に動いたのではなく、ダークネス本人がそう言おうとして発言している。

ダークネスは与えられる快感に負けて、自分から奉仕を始めてしまったのだ。

そんなダークネスの様子を見た戦闘員たちは、ますます猛り、昂り、ダークネスを犯していく。

「そんな風に言われちゃあ……！」

「もっと犯してやらねえとなぁ！」

「あああああんっ！♡」

二穴を同時に貫かれ、ダークネスは大きな声で叫び、絶頂した。

そうして輪姦されること数時間。

ようやく戦闘員たちが満足し、その場を離れて行った。

後には、地面に転がされたダークネスが一人残っている。

すでに一般人たちはその場にいない。ダークネスのあまりの人気に、襲われなくなった彼女たちは記憶操作の後、放置されたからだ。

それぞれ正気を取り戻すと同時に、それぞれの帰るべき場所に帰ってしまった。

ゆえにこの場にはダークネス一人しか残されていない。

全身体液塗れになったダークネスは、いまもまだ絶頂の余韻に震えていた。

「あふ……あひえ……あへ……っ♡」

小さく喘いでいるが、もはやその言葉は形にならない吐息にしかならなかった。

放置されたダークネスは、そのまま自力で起き上がれるようになるまで、動かなかった。

この日から、ダークネスの――月奈の心は、完全に快楽に堕ちてしまったのだ。

◆第五話　堕ちた魔法少女

朝の通学路にて。

男子高校生たちは、いつも見かけるその女子に目が釘付けになっていた。

歩く度に揺れる乳房は、ノーブラであることが窺い知れる。スカート丈はギリギリまで短くなっていて、少し風が吹けば股間が見えてしまいそうだ。

胸元はギリギリのところまで緩められ、胸の谷間を殊更に強調していた。

どう控え目に言ってもビッチでしかないその女子が通り過ぎると、噎せ返るような女の匂いが男子高校生たちを襲う。

それは彼らの本能を刺激し、思わず前屈みになってしまう男子が続出していた。

フェロモンを直接撒き散らしているのではないかというその女子に、男子たちは熱い視線を送る。

その視線を受けたその女子――黒桐月奈（こくとうるな）は、熱い視線を心地よく感じていた。

学校に辿り着いた彼女に、生徒指導の男性教師が声をかける。

「おい……黒桐……ちょっと、お前な……」

月奈の着こなしは、明らかに校則に反したものだ。

本来であれば、叱り飛ばしてでもちゃんと身支度を整えさせるのだが、そのトーンは抑えられている。

「なんですかぁ？　せんせぇ？」

甘ったるい声で、教師に必要以上に近付く月奈。

ガタイがよく、押しが強いはずの男性教師は、本能的にたじろいでしまっていた。

「ああ、いや……なんでも、ない。制服は、ちゃんと着るように、な」

「はぁい♡」

そう応えた月奈だったが、その制服を正そうとはしない。

周りの女子生徒たちは、そんな月奈の様子を見て、なんとも言えない表情で、ひそひそと声を交わしていた。

生徒会長でもある月奈は、本来であれば生徒たちから憧れの眼差しを向けられていた存在だ。

それだけに、その変貌っぷりが信じられず、結果として遠巻きに見ていることしか出来なくなっている。

もしも彼女に対等な友人がいれば、遠慮なく突っ込んで事情を聞けたかもしれないが、生憎月奈にはそんな存在はいなかった。

暫くして、いつも通り授業が始まる。

淡々と進む授業中――月奈は、その両手を股間に入れて、自分の性器を弄り倒していた。

「ンッ……、フ、ゥ……ッ」

一応声を抑えようという努力はしているのだが、静かな授業中ではあまり意味がない。

周囲の女子生徒は、気付かないフリをしていた。触らぬ神に祟りなし、とばかりに見て見ぬふりをしている。

それを喜んでいるのかどうかはよくわからないが、月奈は周囲の反応を気にする様子もなく、授業中であろうとオナニーに没頭していた。

教師から見れば明らかに異常な状態なのはすぐわかるのだが、教師もまた月奈に触れようとしなかった。

結果、月奈は誰に邪魔されることもなく、存分に授業中オナニーを楽しむことが出来ていた。

休み時間になると、挨拶もそこそこに月奈は生徒会室に向かう。

生徒会室の前で、反対側から歩いて来た生徒会書記の真央と鉢合わせる。

「真央っ♡」

「月奈様っ♡」

甘い声で互いの名前を呼び合った二人は、生徒会室に入るや否や、互いに体を抱き締め合う。

休み時間の度に二人はこうして会い、短いながらも濃厚な性行為を行っていた。

真央の手が月奈のスカートの中に潜り込むと、すぐその割れ目から滴った粘液を探り当てる。

「また朝からノーパンで来たんですかぁ？　ほんと変態さんですねぇ？」

「だってぇ♡　すぐ愛し合いたいのに、ショーツとか、邪魔でしょ？♡」

「まあ、わかりますけどねぇ……私も、そうですしぃ♡」

スカートを捲ってノーパンであることを示す真央に、月奈は撫で回してキスをする。

甘い言葉を交わしつつ、互いの体を弄り合う二人。

すっかりレズセックスをするのに慣れた二人は、休み時間の度に生徒会室で落ち合い、短い時間で濃厚に愛し合うのだ。

そんな風に学校生活を終えた後は、月奈は足早に帰路を急ぐ。

（早くディルドを挿入れたい……っ、早くディルドを挿入れたい……っ）

真央とのレズセックスは楽しいが、欠点として真央は男性器を有していないことがある。

体を撫で回し、指で弄り倒すことに関しては、同じ女性なだけあってポイントを心得ているが、子宮を突き上げるほどの長さのものを有していない。

結果、気持ちは良くても表面的な刺激が主となってしまい、体の奥底に溜まる感覚が解消されないという弱点があった。

学校生活の中でそうして溜め込んだ衝動は、月奈の体の中で爆発しかねない勢いで膨らんでいる。

それを解消させるという意味でも、太くて長いディルドでオナニーをすることは必須だった。

そんなことを考えながら街中を歩いていた月奈は、突如怪しげな肥満体型の中年男性に声をかけられた。

「んふ、んふふ……君、ちょっと待ってよ」

その男の目付きは、控えめにいって嫌らしいものだった。月奈の体を隅から隅までじっくりと眺めて、値踏みしている。

ノーブラ・ノーパンの月奈の格好に興奮してしまったのか、安っぽいペラペラのズボンの上からわかるほどにそのペニスを固く大きくしていた。

月奈はその男性から漂ってくる、異様なまでに強烈な男の臭いに、キュンと子宮が反応するのを感じた。

性欲だけしか取り得がなさそうな見た目の男だったが、月奈はその臭いを嗅いだことで、感じるものがあった。

「ね、三枚で、どう……？　もっと出してもいいよ？」

男はそう言いながら、月奈の手を掴み、自分の股間を触らせる。
ズボンを突き破りそうな固さをしているそれを掌に感じた月奈は、その固さと太さにごくりと生唾を呑み込んだ。
「僕、こいつの大きさと太さだけは自慢なんだよねぇ。損はさせないよぉ？」
性欲の強さをアピールしながら、援助交際を持ち掛けてくる男。
そんな男のペニスの感触を手で感じつつ、月奈はその子宮の疼きが限界を超えた。
学校生活の中で高まり切っていたのだから、我慢しろというのは酷な話だ。
月奈はこくりと頷いて、男の申し出を受け入れた。

近場のホテルに連れ込まれてしまった月奈。
かつての月奈であれば、不純異性交遊なんてとんでもないと憤っていたところだろうが、いまの月奈は違う。
「シャワーを浴びてくる。待ってろ」
そういって男が消えたあと、ベッドに座ったまま、もどかし気に足を擦り合わせてしまう。
暫くはなんとか耐えていたが、やがてじっとしていることに堪えられなくなった月奈は、その手を自分の股間に挿し入れ、自慰を始める。
（これから私……あの男に……犯されるのねぇ……♡）

月奈はそう想像を巡らせていた。

女の子として、月奈も理想の男性像を思い浮かべてみたことはあった。

その男性像は大抵が清潔感のある王子様タイプで、いまから相手をしようとしている肥満体の中年男性ではありえない。

そんな男性に、自分が抱かれている想像をして――その背徳感が溜まらなかった。

「ふっ、ううっ、んぅっ……！」

性器を擦り、クリトリスを固くすると、すぐにそのクリトリスを摘まんだ。

強烈な快感が月奈の全身を貫き、体を震えさせる。

そうしている間に、早速一度目の絶頂が訪れた。

「んぐうううっ！♡」

月奈の股間から愛液が噴き出し、腰掛けていたベッドにまだら模様を作る。

息を荒くして絶頂の余韻に堪えていた月奈だが、体の疼きは収まるどころか、ますます強くなっていた。

（ああ……ダメ……っ、やめられ、ない……っ）

男がシャワーを浴びてる間だけ、と思って弄っていたが、手は全く止まってくれなかった。

中年男性がシャワーから戻って来てもなお、月奈の手は止まらなかった。

オナニーをし続ける月奈の姿を見て、中年男性は苦笑いを浮かべる。

「随分とお楽しみだなぁ。自慰を覚えたての猿の方が、まだ慎みがあるんじゃないのか？」

嘲笑の言葉を投げかけられ、月奈は傷つきつつも――手は止まらなかった。

「んぅう♡　ひゃぅんっ♡　だってぇ♡」

「まあ――そうなるように俺がしたんだから当然だが」

そう中年男性がいうと、その体の輪郭が唐突に歪んだ。

月奈が目を丸くしていると、その中年男性の体は怪人としてのものに変わっていた。

「あっ、あなたは……っ！？」

憑依怪人ヒュウ。

数日前に撃退したはずの怪人が目の前に現れ、月奈は動揺した。

「ここ数日、お前の周りで起きたことはな――全部俺が原因なんだよ」

思い出させてやろう、とヒュウはパチンと音を鳴らす。

すると、月奈は封じられていた記憶が全て蘇るのを感じた。

生徒会書記の真央を助けようとして、憑依怪人に体を乗っ取られたことから、快楽に堕ちてしまった原因となった、戦闘員たちとの乱交についても。

全てヒュウが裏で糸を引いていたことが理解出来た。

「俺もここまで上手く行くとは正直思っていなかったんだがな……お前の魂はすでに完全に汚染されている。もはや淫欲に支配され、気持ちよくなることしか考えられまい」

「くっ……！　ふ、ふざけないでッ！　理由がわかったなら、貴方の思い通りになんか……ッ、ならないっ！」

侮辱されたと感じた月奈は懸命に怒りを露わにし、ヒュウに食って掛かるが、そのヒュウは実に楽し気に笑うだけだった。

「くははははっ！　おお、そうかそうか！　俺の思い通りにはならないか！　じゃあそれはお前がしたいからしてるってことだな！」

「なっ、なんのこ――んあっ！？♡」

月奈は突然股間から生じた強い快感に声を詰まらせる。

驚いた彼女が自分の股間を見下ろすと、そこでは彼女自身の手が、クリトリスを摘まんで押し潰すように刺激を与えていた。

「うあぁっ！♡　これっ、はっ♡　ちがぁっ♡　あううっ！♡」

必死に手を股間から離しながら、月奈は声を荒げる。

「あ、あなたが、体をっ、操ってっ、るんでしょ……！」

そうに決まっているとヒュウを睨みつける月奈に対し、彼は冷静だった。

「おいおい、とんだ濡れ衣だぜ。俺が体を操れるのは、俺自身が憑依している時だけだ。そして……ご覧の通り、俺はここにいるわけでな？」

つまり、今の月奈の体の動きは、月奈自身で行っているものなのだ、とヒュウは説明する。

「そんなわ――けぇっ！？♡」

「ほら見ろ。お前の体と……魂とでもいうべきもんが、快楽を求めてるんだよ」

素っ頓狂な叫び声を上げてしまったのは、またも月奈の体が股間を弄り出していたからだ。
指を数本まとめて膣に突き入れ、ぐりぐりと回転させて膣壁に刺激を与えている。
「はっ、はぅっっ♡　んああっ♡」
（止まって……ッ、止まってよぉ……ッ！　なんで、止まらないのぉ！）
月奈は泣きそうになりながら、心の中で必死に懇願するが、それでも彼女自身の体は止まらない。
手の動きは激しくなり、月奈の腰が浮きあがる。
「あっ、あーっ！　あぁぁーっ！♡　イクッ♡　イクッ！　イっちゃぅうう――ッ！♡♡♡」
浮かび上がった腰をガクガク震わせながら、月奈は絶頂を宣言しながら達してしまった。
突き出した腰から潮が噴き出し、ホテルの床を汚していく。
「ハーッ……ハーッ……ハーッ……！」
荒い呼吸を繰り返し、悶絶している様子の月奈を見下ろし、ヒュウは笑みを浮かべる。
「ほぉら見ろ。お前はもう魔法少女じゃなく、快楽の奴隷に――」
ヒュウがそう揶揄しようとした、その瞬間。
「セイントエナジー・メイクアップ！」
月奈は魔法少女・リリィダークネスに変身した。

憑依怪人ヒュウは、目を丸くして驚く。

「馬鹿な……！？　……まさか、絶頂後の一瞬、理性が戻ったというのか！？」

すでに完全に快楽に堕ちていると考えていたヒュウは、ダークネスの意志の強さに驚愕するしかない。

全力戦闘を終えた後のように息を荒げてはいたものの、ダークネスはその瞳に戦う意思を宿していた。

「はぁ、はぁ、はぁ……！　あなたは……ここで倒す……！」

ダークネスはヒュウに向けて魔力を練り始めた。

憑依怪人の厄介なところは、誰かに憑依している時は無暗にその体を傷つけるわけにいかないという点だ。

必然、攻撃手段も限られるため、大したことのない強さであっても、苦戦する理由になる。

そんな厄介な能力を持つ怪人が勝利を確信し、誰かに憑依するわけでもなく、自分の体で魔法少女の前に立っている。

これほどの好機はない。

「喰らえ……！　『ダークネス・ブラ――」

ダークネスが放とうとした技は、ダークネスの最終奥義であり、一撃必殺の技『ダークネス・ブラックホール』。

ありとあらゆるものを一点に集約し、強力な魔法障壁であろうと防御能力であろうと、全てを無に帰す究極魔法。

それを放った時の反動は凄まじい物となるが、それだけの威力がある究極の魔法。

その選択は間違いなく正しかった。

一瞬で片をつけなければならない、というダークネスの勝負勘は正しかった。

だが――ヒュウは、その腰に巻いていたタオルを脱ぎ落とすという、僅かな動きだけでダークネスの究極魔法に対抗出来た。

それまで隠されていたヒュウのペニスが、露わになる。

ただの男性器なら、何にもならなかっただろう。発動したブラックホールの中に呑み込まれ、点となって消滅するだけだった。

しかしそのペニスを見てしまったダークネスは――子宮が強烈に疼き、腰砕けになってしまった。

「あぅっ！」

ガクリと膝を突き、へたり込んでしまう。

それでも視線はヒュウのペニスから全く離せない。

「くっくっく。見覚えがあるだろう？　何十回と世話になったはずだぞ？」

ヒュウの勝ち誇った言葉に、ダークネスは理解せざるを得なかった。

そのペニスは、ダークネスのところに送られて来たアダルトグッズの一つ、ダークネスの処女を散らしたディルドの形状と瓜二つだったのだ。

「あ、ああ……あああ……っ！」

ダークネスにとって、そのディルドは自分に足りない快楽を与えてくれる最高のパートナーだった。

それを咥え込んで腰を動かすだけで、乾いた気持ちが満たされた。

形も、大きさも、太さも、何もかもが最高の存在だった。
惜しむらくは、ディルドであるがゆえに、動いたりはしないということ。
そして材質上、暫く手で温めてからでないと、ひんやりとした感触が僅かに興を削ぐこと。
不満ともいえないほど、小さな疵。
それを完全に満たした完璧なペニスがいま、ダークネスの目の前に存在していた。
「うぅ、ううううっ……！」
発動しかけていた魔法が消滅する。
ダークネスの意志が揺らぎ、魔法の構築を維持出来なくなったのだ。
腰砕けになって動けないダークネスを、ヒュウが押し倒す。
「ほれ、素直になった方がいいんじゃないかぁ？」
「うぅうう……ッ！」
ニヤニヤと笑いながら、仰向けに倒れたダークネスに馬乗りになり、そのお腹にそのペニスを打ち付けるヒュウ。
ダークネスはごくりと生唾を呑み込みつつも、それに屈しないように目を瞑って顔を背けた。
歯を食いしばって耐えようとするダークネスの体を、ヒュウの手が愛撫し始める。
丹念に胸を揉み、谷間に押し込むようにペニスを差し込んだ。
「はぅうっ……！」

「ほれ、俺のペニスの感触を胸でも感じられるだろ。どうだよ？　こいつをマンコのなかにも入れてほしいだろお？」

言葉で煽り倒すヒュウの顔を、ダークネスは強い視線で睨んだ。

「わたっ、私はぁ……ッ！　負け、ないぃっ……！」

ペニスに屈してなるものかと声を絞り出すダークネス。

その強情極まる態度に、ヒュウはさすがに呆れざるを得なかった。

「たくっ……何が負けない、だよ」

ダークネスの膣からは、まるで早く入れろと言わんばかりに、愛液が尿の如き勢いで噴き出していた。

心はまだしも、体は完全にペニスを入れて欲しいと求めているのだ。

膣の入口は激しく痙攣し、まるで魚の口のようにパクパクとペニスを求めている。

ヒュウはダークネスの腰を地面に抑えつけつつ、そのペニスを膣へと押し付けた。

「や、やめっ」

「先っちょだけだから、安心しなっ」

そうヒュウは告げると、慎重に腰を突き出してペニスの亀頭部分だけをダークネスの膣に挿し込んだ。

「〜〜〜ッッッ！？！？♡♡♡」

その瞬間、ダークネスは想像の何倍もの快感が襲い来るのを感じた。

ディルドと形状は一緒のはずなのに、血の通った本物というだけで、感じられる快感が桁違いに高いのだ。



「ふぎいいぃっ！」

腰が暴れ、勝手に突き出してしまいそうになるのを、ヒュウが抑えつける。

「勝手に入れようとしてんじゃねえよ。こっから先まで入れて欲しければ……自分の意志で、自分の口でおねだりしてみな」

「そん、な……っ」

そう言われても、どうおねだりをすればいいのかわからない。

月奈は一瞬そう思ったが、不思議とそのための言葉は自然と頭の中に浮かんできていた。

どういえばヒュウが満足してくれるのか、自然とわかる。

「さあ、言え、おねだりして、楽になれ」

「……ッ！」

ヒュウの甘い囁きに、ダークネスの心が揺れる。

それに加えて、ダークネス本人の欲求もまた、それを受け入れようとしていた。

気持ちよくなってしまえばいい。ここまで頑張って来た。ここまで苦労して孤独に耐え、その力を人々のために使って来た。何の見返りもないのに。

ここまで我慢したなら、いいじゃないか。

月奈自身の欲望がそう促してくる。

（そうかも、しれない……っ）

もう堕落してもいいじゃないか。

そんな気持ちが高まり切った、その時。

月奈の脳裏に聖羅の顔が浮かんだ。

月奈と一緒に戦い続ける魔法少女のパートナー。月奈の希望。

孤独に打ちひしがれていた自分を、優しく日の当たる場所に連れて行ってくれた聖羅。

その陽だまりのような笑顔が、月奈の心を照らしていく。

（そうだ、私は――リリィダークネス……！　リリィシャイニングの、パートナー……！）

聖羅の顔を思い浮かべるだけで、ダークネスの意志が燃え上がる。

（私は――）

欲求なんかに、負けない。

ダークネスがその強い意志を持って、欲求を跳ねのけようとした時。

「――んあ、あああああああんんっっ♡♡♡」

突然、隣の部屋から蕩け切った女の声が聞こえて来た。

ラブホテルゆえに壁は分厚く、防音対策もされているはずだ。

それを貫通して声が聞こえるということは、凄まじい声をあげているということになる。

その事実にも驚きだが、月奈の心に引っかかったのは、その事実自体ではなかった。

（いまの、声……？　いえ、そんな、まさ、か……？）

聞き間違いに違いない。

だが、月奈にはその聞こえて来た声が、どうしても聖羅の声のように聞こえてしまった。

再度声が響き、また壁を貫通して聞こえてくる。

何度聞いても、やはり聖羅の声に感じる。

気のせいだ、と自分に言い聞かせる月奈。

一方、ヒュウは純粋にラブホテルで隣の部屋の声が聞こえたことに驚いていた。

「なんだぁ……？　隣の女は、ずいぶん楽しんでるみてぇだなぁ。あんな大声で喘げるとしたら、好き好んで誰彼構わずペニスを咥え込む、相当なビッチでしかありえねえよ」

ヒュウの言葉に誘発されて、隣の女性がだらしのない、締まりのない顔をして、ペニスに吸い付いている光景が月奈の脳裏に浮かんだ。

そしてそれは月奈の中では、聖羅の姿で浮かび上がってしまった。

自分の希望である聖羅が、男に媚びてペニスを咥え込んでいる光景を想像した瞬間――支えになっていたものが支えにならなくなった。

（そうよね……聖羅だって……きっと私と同じ目にあえば……私と変わらない……）

結局自分も聖羅も、ただの人間の雌でしかないのだ、と諦めの感情が月奈の胸中を埋めつくしていく。

「――ぽ、くださ――」

月奈の口から、その言葉は、自然と零れ落ちていた。

「ん？　なんだぁ？　もっとでっかい声でいえ」

聞こえていただろうに、あえてもう一度言わせるヒュウ。

月奈は声を張り上げ、再度同じことを口にした。

「私のよわよわマンコにっ、あなたのおっきくて逞しいおチンポ、くださいっ！」

それは屈服の言葉だった。さらに行動でもそれを示すべく、月奈の足がヒュウの腰に絡みつき、引き寄せようとする。

すでに亀頭が挿入されている状態でその行動は、自らペニスを奥に招き入れるに等しい行為だ。

ヒュウは完全に屈服させたことを悟り、ニヤリと笑う。

「よく、言った！　望み通り――くれてやる！」

一気に腰を突き出すヒュウ。

ペニスが根元まで挿入され、強烈な衝撃が月奈の全身を貫いた。

「ンあああああああッ！！♡♡♡」

先程隣の部屋から聞こえて来た声に負けないくらい大きな声で喘ぐ。

ヒュウの腰に回した足をしっかりと絡みつかせ、いわゆる『だいしゅきホールド』の体勢を取った。

挿入されたペニスを逃さないと言わんばかりの行為に、ヒュウは苦笑する。

「く、くくくっ！　全く、強欲な奴だ……！　だが、いいのか？　このまま膣内に射精すれば、貴様の体は完全に俺のものとして支配でき――んぅおっ！？」

揶揄うつもりで口にした言葉が、途中で遮られた。

それはペニスを受け入れた月奈の膣が、ペニスをもぎ取りそうなほどの強さで締め上げたからだ。

月奈の膣内はまるでそこだけ機械仕掛けかのような、凄まじいパワーを発揮していた。もし普通の人間のペニスだったなら、圧迫され過ぎて鬱血し、本当に捥ぎ取られていたかもしれない。

怪人であるヒュウだからこそ、その締め付けに堪えられた。

「いいっ、いいのっ！　全部支配してっ！　私の全部あげるから！　ちょうだい！　チンポから熱いの出してッ！」

そう言いながら、自分から激しく腰を動かし始める月奈。

「ぐぅう……っ！　よ、良かろう……！　そこまでいうのなら……貴様の全て、もらい受ける……！」

ついに、その時が訪れた。

ヒュウのペニスの先端から精液が迸り、月奈の子宮内を濃い精液が満たしていく。

子宮内にザーメンが放たれ、染み込んで来る感触と共に、月奈は自分の魂に別の魂が染み込んで来る感覚も覚えていた。

「ん〜〜〜〜っっっ！！！♡♡♡」

心と体が同時に侵されていく感触を感じつつ、月奈はとても恍惚とした、心地よさそうな顔で快感にその身を仰け反らせた。



月奈の身体に覆い被さっていた中年男性の体はどろりと影へと溶け、そのまま闇に混ざって消えてしまう。

暫くの間、その部屋には静寂だけが満ちていた。

だが不意に、その部屋に唯一存在した月奈――ダークネスの体が笑い始める。

「く、くくく……ははは っ、くははははは っ！　やった！　やったぞ！」

それまでのダークネスらしかぬ言葉で、そのダークネスは笑う。

「ついに！　ついに手に入れた！　最強の魔法少女――リリィダークネスの肉体を！」

立ち上がったダークネスは、その片手を体の前で翳し、そこに魔力を集中させる。

ブラックホールの如き黒点が生じ、凄まじい魔力嵐が吹き荒れた。

「少し魔力を集中させただけでこれか……！　内側から溢れでるこの魔力！　そして……見る者全てを魅了する完璧な容姿！　最高の体だ！」

ダークネスは高らかに笑いながら、掌に生じさせた黒点を握り潰す。

「くっくっくっ……これが全てを支配した時の感覚か……ここまでの全能感は、いまだかつて感じたことがないなぁ」

そう呟きながら、ダークネスはホテルに用意されている姿見の前に立った。

そこには、妖艶な笑みを浮かべたリリィダークネスの姿が映っていた。

いままでとは明らかに違う禍々しい魔力が、その体を覆っている。

「……魂の一欠片も残さず、俺色に染め上げられた気分はどうだ？　月奈」

ダークネスが――ヒュウがそう胸像に向けて呼びかけると、鏡の中のダークネスは媚びた表情に変わった。

「闇の魔力が魂と体を循環して……ずっと全身を愛撫されているみたいで、最高の気分です。ご主人様ぁ♡」

自分の胸に両手を当て、微笑む。

「私の全てを……リリィダークネスとしても、黒桐月奈としても、私の持つ全てを、ご主人様に捧げることを誓います♡」

躊躇いなくそう宣言する月奈に対し、ヒュウは体の変身を解除しながら告げる。

「全てを捧げる……か。ならばもっと、それに相応しい姿があるはずだな、月奈」

制服姿に戻った月奈は、ヒュウに言われた言葉に思考を巡らせる。

そしてすぐに、思い浮かぶ言葉があった。

かつて月奈が聖羅と協力して鎮めた、ネビリムの災禍を起こした堕落した魔法少女たちが口にしていた言葉。

「ネビルエナジー・メイクアップ♡」

月奈は誰かに強制されるのではなく、自分からその変身起句を口にする。

月奈の、ダークネスの体を、闇の魔力が包み込んでいく。

魔力が体を覆っていく感覚は、まるで愛撫されているかのような感覚だった。

リリィダークネス改め、ネビルダークネスとして生まれ変わる。



その格好はかつて月奈がヒュウによって着せられたボンデージ衣装に似ていた。
頭にはウサギの耳のような飾りが付いており、胴体部分が無防備に晒されていることは変わりない。
両手両足の大半はラバー状の衣装で覆われており、一言で言い表すのであれば、逆バニーという表現がもっとも近いだろう。
リリィダークネスの時のバニースーツのような格好が反転したからそうなった、という意味では、とてもしっくりくる姿であった。
「ふぅ……ネビルダークネス、変身完了です♡」
そう微笑んだ月奈の顔が、ヒュウのものに変わる。
主導権は完全にヒュウのものになっているため、いつでも入れ替われるのである。
「さて……完全に支配できたかどうか……少し、試してみるか」
そう呟いたヒュウは、溢れ出る闇の魔力を練り、影の触手を生み出した。
それはかつてリリィダークネスが影を自在に操っていたのを彷彿とさせる力だ。
生み出された影の触手は、地面に落とされると暫く蠢いていたが、狙いを定めたかと思うと、一気にダークネスの体に向けてその体を走らせた。
「ぁあんっ！♡」
影で出来た触手が、ダークネスの体に絡みつく。
その触手が体を這い回る度に、ダークネスは強い快感を覚えてしまっていた。

闇の魔力が形になったその触手は、触れるだけでダークネスの快楽を呼び覚まし、その体を悶えさせる。
さらにその触手はダークネスの表面のみならず、内側にもその浸食を進めていった。
触手の先端部分が、ダークネスの膣と肛門、そして口、鼻、耳と穴という穴に侵入していく。
影であり実体は無いに等しいため、鼻や耳といった狭い穴であろうと、関係なくその内部に侵入していくことが出来る。
「んおおおっ♡　おおっ！♡」
鼻と口を塞いでしまったら普通息が出来ずに窒息してしまうが、影の触手は影ゆえに空気を通す。
窒息の心配もなく、肺や胃に至る道まで全てを犯し尽くすことが出来るのだ。
「んおおおっ♡　んごおおおおおっ！！♡♡」
激しく体を波打たせて悶えるダークネス。
いくら実体がないとはいえ、触れて来ている感触もまた確かに存在する。
そんな触手に体の奥まで犯し尽くされて、平気な者は存在しない。
見開いた目から大粒の涙を流して悶え、嘔吐しそうになるのを必死に堪える。
そんなダークネスの努力を嘲笑うかのように、影の触手はわざと擦り当てるようにダークネスの喉を犯し続けた。
最初は苦しくて顔を顰め、涙を流していたダークネスだったが、徐々にその表情が変わっていく。
「ンぶううっ♡　んぎゅうううっ♡　んびいいいっ♡」

苦しみもまた気持ちいいとばかりに、触手の挿入と排出を悦んでいた。

狂ってしまったかのようにも見えるが、与えられる感覚に慣れて来たことが大きい。

さらに影の触手はダークネスにとって、いわばもう一つの腕。

それまでは犯される側の感覚しか感じる余裕がなかったが、犯される激しい感覚に慣れて来たことで、触れている側である触手の感覚も味わう余裕が出来て来た。

つまり、ダークネスは現在、犯す快感と犯される快感、どちらも平等に味わうことができているというわけだった。

気持ちよさそうにその二つの感覚を味わうダークネス。

（この力を使えば……もっともっと色んなことが出来る……♡）

体内に挿入されている影の触手に、回転を加えさせる。

ドリルで抉られる快感が膣から爆発した。

本物のドリルであれば、例え先端を柔らかい素材にしたところで、膣内が裂けるか分泌液を飛ばし過ぎて粘液に傷をつけてしまうか、いずれにしても悲惨な未来しか浮かばない。

だが実体ではないが限りなくそれに近い感覚を与える影の触手であれば――存分に異次元の快感を味わうことが出来る。

「んぎいいいいいっっ！！♡♡」

ダークネスの体に宿っている二つの魂は、犯す快感と犯される快感、同時に流れる二つの感触を味わいながら、

ひたすら快楽に耽っていた。

こうしてリリィダークネスは、ネビルダークネスと成り果てたのだった。

◆第六話　魔法少女リリィシャイニング

リリィシャイニングこと白鶴聖羅（しらつるせいら）は、聖ウルスラ女学院に通う１８歳の、正真正銘のお嬢様だ。
彼女は魔法界の賢者ルミナスから力を授かり、魔法少女リリィシャイニングに変身できるようになった。
活動歴は四年ほどとまだまだ長いとは言い難いが、その高い潜在能力で優秀な魔法少女であるといえる。
そんな彼女は普段コンビを組んでいる魔法少女リリィダークネスとは別行動で単独調査を行っていた。
夜の街を歩きながら、時折高いところに飛び上がっては探索魔法を放つ。

「サーチ・ライト！」

彼女の探索能力は特別優れてはいないが、特別劣っているわけでもない。
闇の魔力の残滓を効率的に追いかけられるという意味では、便利な探索能力だった。
しかし今回、放った光はどこかに辿り着く前に空中で消えてしまう。

「……むぅ、今回もダメでしたわね」

腕を組んで考え込むシャイニング。腕組みをした拍子にその大きな乳房が組んだ腕の上に乗り、少し楽な状態になるため、考え込む時には自然とそういうポーズを取ってしまうのだった。
ただ、そうするとその膨らんだ乳房が非常に目立つため、周りは視線の持っていく先に困るというはた迷惑な癖であったりする。
少々天然が入っている本人はもちろん気付く由もなく、考え事を続ける。



「これで五件目の犯行現場ですけれど……また犯人の影も形も掴めませんわ」

溜息を吐いたシャイニングは、一端地面に降りて、魔法少女の変身を解く。

女学院の制服に身を包んだ長い銀髪の少女が現れる。水着のような魔法少女の衣装に比べ、長袖かつハイソックスの制服は肌の露出が極めて少ない清楚な作りをしていた。

ただ、聖羅の場合はその胸が張り出すような造りのせいで、少々胸の大きさが際立ってしまうという悩みがあった。

なるべく目立たないようにしてはいるのだが、どうも制服を決定する際に、聖羅ほどの大きな胸の持ち主のことは想定していなかったようだ。

スカート丈は短いように見えるが、しっかりとした造りで、風で捲れあがることはそうそうないように出来ている。

変身を解いた聖羅はカバンの中から、今回の事件の資料を取り出した。

（いずれも犠牲者は男性の方なのですよね……）

その事件は、一言でいえば男性の生命力が奪われるというものだった。

生命力を奪われた男性は重度の熱中症のような症状となり、いずれも病院に運ばれている。いまもほとんどの男性が入院中とのことだった。

生命力を奪われると病気に対する抵抗力なども減じてしまうため、入院が長引くのはやむを得ないことだ。

（直接的な命の危険こそないものの……じゅうぶん命を危険に晒す行為ですわ……犯人の目的はわかりませんが、

許せませんわ！）

聖羅はそう考えながら、事件の概要をまとめた書類を捲ってその事件のことを再確認する。

被害を受けた男性たちの顔写真も、資料には添付されていた。

被害者の共通点から何か見出せるものがないかと、聖羅は資料を何度も見返す。

（……何か法則があるのかと思いましたが、特になさそうですわね……それこそ、たまたま見かけた者を手当たり次第という感じ……ん……？）

ふと、聖羅は被害者たちの顔を見ていて、引っかかるものを感じた。

「……？」

だがその感覚の正体がよくわからず、首を傾げることしか出来ない。

もう一度被害者たちの顔を順番に眺めて行った聖羅は、引っかかる理由を見出す。

（何でしょう……この方たちとは会ったこともないはずですが……何か、見覚えがある、ような……？）

記憶を辿ってみる聖羅だが、やはり見覚えはあるがその男性たちと会った場所の検討がつかない。

そこで聖羅は、行動圏内が被っている可能性を考えた。

（そういえば彼らが襲われた現場は、いずれもわたくしの通学路からほど近い場所だったような……時々すれ違っていた、という可能性はありそうですわね……）

じっと被害者の写真を見つめる聖羅。やはり思い出せはしなかったが、その「たまたま道ですれ違った」程度という感覚は正しいように思えた。

その時、不意に聖羅の子宮がきゅんと疼いた。

誰が側にいるわけでもなかったが、急に疼き出した体に羞恥を覚え、頬を赤くして周囲を見渡す聖羅。

（また、ですの……？　もう……そんな、いやらしい人間ではないはずですのに……）

これまで生きて来た中でそんな風になったことは一度もなかった。

街中を歩いていて急にいやらしい気分になるなど、ありはしなかったのだ。

（どこかおかしいのでしょうか……？　一度、病院かどこかにかかった方がいいのでしょうけれど）

ともあれ、体が火照った状態で外を出歩くのは避けたかった聖羅は、近場の公共トイレに駆け込んだ。

個室に入ってホッと一息を吐いた聖羅は、スカートをたくし上げて便座に座る。

ショーツは履いたままだったが、性器を弄るのに問題はなかった。

なぜなら、聖羅がスカートの下に履いていたショーツは、大事な部分に穴が空いている痴女のようなショーツだったためだ。

制服のリボンを緩め、胸元を大きく開いて、乳房を露出させる。ブラジャーは普通のもののように見えたが、実はその乳首に当たる部分に穴が空いており、そこから乳首が飛び出すような仕組みになっていた。

制服の生地がしっかりしているため目立たなかったが、よくみると乳首が浮いているのがわかったはずだ。

普通ならありえないショーツとブラを身に着けていた聖羅は、特に気にすることなく、股間と乳首を弄り始めた。

（んっ……膣は……まず全体をゆっくりめに……それから、しっかりクリトリスの周りを刺激して……）



淡々と、オナニーを始める聖羅。

頭の中で、どこで仕入れたかも忘れたオナニーの手順を反芻していた。

（乳首は急に摘まない……まずは全体を優しく揉んで、乳首が固くなったら薄く摩るように……）

どこで学んだかもわからないなりに、その手順は非常に真っ当なものだった。

さらに聖羅は気分を盛り上げるべく、頭の中で映像を思い浮かべる。

何を思い浮かべるか悩んだが、聖羅はなぜか先ほど見た事件の犠牲者たちとセックスする光景を自然と思い浮かべていた。

まるで本当にセックスしたかのように、視点も完璧に思い浮かべることが出来る。

清潔そうなサラリーマンが激しく犯してくるイメージで、如何にも乱暴そうなチャラ男は案外セックスが優しいイメージ。

そんな普通からは外れた想像をしながら、聖羅はオナニーを続けた。

（んぅう……っ、以前は、こんなことなかったはず……ですのに……っ）

そう思いながらも、慣れた手つきでオナニーをする聖羅。

やがてイメージの中でのフィニッシュが近づくと同時に、絶頂していた。

「ンぅウウ……ッ！　……ふぅ……ふぅ」

声をあげるのをなんとか堪えた聖羅は、息を荒げつつも手早く身だしなみを整える。

その時、聖羅はほんの僅かに腹部が発光しているような、そんな暖かい感触を覚えた。

「……？　何ですの？　きのせい……？」

聖羅はその感覚の正体がよくわからず、結局何かを確かめることもなく、トイレを出てしまった。

彼女の丁度服に隠れる部分の下腹部には、怪しげな紋章が微かに浮かび上がっていたのだ。

自分がどほれど異常な行動をしているのか、聖羅は全く意識出来ていなかった。

◆第七話　淫魔の呪い

それは、シャイニングが連続衰弱事件を追い始める少し前の話。

セイントの輪から『人がネビリムの残党に襲われている』という情報を受け取り、シャイニングは現場に急行していた。

「あそこですわね……！」

街中の一角で、人々が入り乱れて大混乱に陥っているのが見えて来た。

高いところからその光景を見下ろした聖羅は――思わず目を覆ってしまった。

「な、なんですの、これは……！」

聖羅（せいら）の目の前、街中で堂々とした乱交が行われていた。

男女入り乱れて性的な行為を繰り広げている。

シャイニングはあまりそういったことには慣れておらず、赤面してしまっていた。

（い、いけませんわリリィシャイニング……！　この方たちは明らかに普通ではありません！　間違いなく、ネビリムの残党による扇動が行われて……！）

そう考え直し、冷静にその光景を眺めていく聖羅。

するとすぐに、人々を扇動している諸悪の根源が見つかった。

「は～い、貴方も素直になりましょうねぇ♡」

それは、サキュバスと呼ばれる種族のようだった。

一人の青年の頭を鷲掴みにして、身動きを封じている。

「や、やめろ……っ、僕には、愛する妻が……っ」

「あ～ダメダメ～。そんな一途の愛なんて今時流行らないわよ～。ほら、そこを歩いていた女の子を使わせてあげるから、ヤりなさい♡」

サキュバスは怪し気に光る眼で、嫌がる青年の顔を覗き込む。

すると男性の目も怪し気に光り始め、掻き毟るようにしてシャツを引き裂き、上半身裸になる。

「あああ……っ！　うあっ、あああああっ！」

さらにズボンを突き破る勢いでペニスが膨張し――もどかし気にズボンをずらした。

そそり立つ肉棒を振り回しながら、サキュバスが指し示していた女の子の方に近付いていく。

女の子は女の子で、自分で自分の膣を弄り倒しており、とても正気には見えなかった。

ペニスを露わにした青年が近づくと、その茫洋とした顔を青年に向け――口からボタボタと涎を垂れ流し始める。

その小さな口に、青年のペニスが押し込まれた。

アイスキャンディにでも吸い付くように、女の子は青年のペニスに吸い付き、青年は少女の頭を両手で鷲掴みにして激しく犯し始める。

とてもまともではない光景だった。

「うふふっ♡　さて、と次は……」

「お待ちなさい！　そこまでですわ！」

シャイニングはこれ以上の犠牲者を出すまいと、一気にそのサキュバスのところに跳んだ。

サキュバスは咄嗟にその場から跳び退って距離を空け、現れた魔法少女であるシャイニングを睨みつける。

「ちぃっ……！　魔法少女ね！　忌々しい……！」

「あなたの悪事はそこまでです！　このわたくし、リリィシャイニングが来た以上、好き勝手はさせませんわ！」

びしり、と指をサキュバスに指して宣言するシャイニングに、サキュバスはその目を瞬かせる。

「……リリィシャイニング、ねぇ……ふん。何も言わずに不意打ちで攻撃してくればいいものを」

「それは卑怯な振る舞いですわ！」

そう堂々と宣言するシャイニングに対し、サキュバスは目を細めた。

「ふぅん……？」

「さあ、名もなき怪人、貴女も名乗りなさい！　そして正々堂々勝負ですわ！」

「あたしにメリットないんだけど？」

なんで名乗らなければならないのか、と本気で思っている様子で、サキュバスは応える。

その質問に対し、シャイニングは堂々と胸を張って応えた。

「メリットならありますわ！　名乗りを上げておいてもらわないと、ただの淫魔として方向書を書かないといけません。淫魔は階級が低いので、大したことのない存在だったと記録に残ることになってしまいますわよ？」

「なるほど……いや、やっぱり私にメリットないけれど、仕方ないから名乗ってあげるわ」

感謝しなさい、と恩着せがましく告げた後、サキュバスは名乗りを上げる。

「あたしの名前はネイア。淫魔のネイアよ。覚えなくても別にいいわ」

「いいえ、しっかり記憶しましたわ。ここで倒すつもりなのですから、覚える必要はないかもしれませんが……！」

これで最低限の義理は果たした、と言わんばかりにシャイニングが魔力を練り始める。

だがネイアは、シャイニングの性格を短いやり取りで正確に把握していた。

「甘いわねっ！　こちらの方が速い！　はぁっ！」

闇の魔力を素早く練ったネイアは、即座に魔法を放つ。

ただしその魔法を放った先は、シャイニングではなかった。

まだ正気を保っている人間たちの中で、最も若い部類に入る男の子をその黒い魔球は狙っていた。

「っ！？　何をしますのッ！」

まさかいきなり自分ではなく周りの人間を狙うとはシャイニングは全く予想しておらず、防護魔法が間に合わない。

練りかけていた攻撃魔法を放棄し、全速力で駆け、体をその男の子とネイアの間に捻じ込む。

黒い魔球はシャイニングの腹部に直撃した。

「魔法少女のお姉さん……！」

庇われた男の子が、悲鳴を上げる。

その悲鳴を聞いたシャイニングは、絶対に倒れられないと感じた。

「グフッ……！　なん、のっ……！　これしき、ですわ！」

魔球の衝撃が全身を突き抜けて行ったものの、シャイニングはお嬢様らしかぬガッツで耐え、技を繰り出す。

「シャイニング・アロー！」

光の弓矢を生み出し、それを引き絞って放つ。

矢は通常の矢と同程度には速かったが、通常の矢の早さでは、怪人であるネイアを捉えることは出来ない。

軽く身をかわすネイア。

「はっ、こんなものであたしを仕留められるとでも――」

矢がネイアのいる場所を通り過ぎようとした刹那。

その矢が爆裂して光が撒き散らされた。

光を浴びたネイアの肌が、じゅうと灼ける。

「んぎゃあああああっ！？　じょ、浄化の、ひか、りぃいい……ッ！？」

「わたくしに動き回る対象に矢を当てるような技量はございませんが……これなら、問題ありませんわ」

勝ち誇った様子で再度光の矢を番うシャイニング。

今度の矢は、相手が足を止めていたため、ネイアの胸の中央に突き立つ。

そして、今度こそ爆散した。

「おの、れ……ぇ……っ」

断末魔が小さく響き、ネイアは粉々になって、消えてしまう。
ネイアが消滅すると同時に、乱交していた人間たちが落ち着き始める。
シャイニングはひとつ息を吐き、自分の体を見下ろす。
（なんともない……ですわね。ギリギリ防護魔法が間に合ったのでしょうか？）
確かに全身を貫く衝撃が走ったように感じたが、魔球を受けた場所もどこも妙なことにはなっていない。
自分の体の状態を確かめていたシャイニングのコスチュームの裾を、小さな力が引っ張った。
「お、お姉ちゃん……だい、大丈夫……？」
怯え切った様子を見せているのは、魔球に狙われていた男の子だった。
ぐずぐずと鼻を鳴らしてはいるものの、シャイニングのことを心配する程度には自分本位ではない。
シャイニングはそんな男の子を安心させるように笑みを浮かべて見せた。
「ええ。わたくしは強いので大丈夫ですわ。心配してくれてありがとうございます。優しいですわね」
頭を撫で、男の子を落ち着かせるシャイニング。
「男の子なのですから、強くなって大切な人を守れるようになりなさい。優しいだけでは、人は救えませんわ」
幼い男の子に告げるには残酷な現実を、シャイニングはあえて突きつける。
それはシャイニングが彼を子供扱いしていないということでもあった。
その気持ちは男の子にも伝わったのか、力強く頷いて、決意を滲ませた瞳を煌めかせたのだった。

淫魔ネイアと戦い、その後の記憶封印処置などの事後処理を終えたシャイニングは、ようやく自宅に帰って来ていた。

「ふぅ……今日も中々ハードでしたわ。あのレベルの淫魔が、あんなに簡単に倒せてしまったのは驚きでしたが……」

シャイニングは決して直接戦闘に向いているタイプではない。

運動神経自体はそう悪くないが、どうしてもその力の性質自体が戦い以外の、補助や回復に向いているためだ。

たまに現れる瘴気を撒き散らすタイプや、病気などを操って人々を苦しめることに特化した相手であれば、その力は十全以上に振るえるが、純粋なフィジカルタイプの怪人や、攻撃魔法や防御魔法といったシンプルな威力の魔法を使う相手とは相性が良くない。

今回の淫魔はシャイニングでも対応できる程度のレベルではあったが、もっと強い淫魔相手では決定打に欠けてしまうのだ。

「ふぅ……仕方ないことではありますが、やはりダークネスと組んでの任務が、一番安定しますわね」

パートナーとして組んでいるリリィダークネス――月奈のことを思う聖羅は、胸の内が暖かくなるのを感じる。

月奈側はシャイニング――聖羅のことを『自分にとっての陽だまり』と称しているが、それをいうなら聖羅の方もまた月奈の事は頼りになる相棒として全幅の信頼を置いていた。

ダークネスとシャイニング、非常に相反する性質のようでいて、互いが存在してこその自分、という認識は、

お互いに持っているのである。

そんなことを考えながら、シャイニングはいつも通りシャワーを浴び始めた。変身を解除すれば戦いの中で付着した汚れなどは綺麗に落ちるとはいえ、やはり心情的にはなんとなく気になる。

たわわに実った胸を曝け出し、シャワーを浴びてその体についた汚れを洗い落とす。

体のラインをお湯が伝って落ちていく気持ちいい感触を感じていたシャイニングは、ふとその下腹部に微妙に熱を持つアザのようなものが浮かんでいるのに気付いた。

「ん……？　これは……あの魔球を受けたところ……ですわね？　やはり多少の影響は出てしまっていましたか……」

何ともなっていないと思っていたが、どうやら影響が残ってしまっていたようだった。

とはいえ、特に酷いアザになっているわけでもなかったため、問題ないだろうとすぐにそのアザのことは忘れてしまった。

シャワーから上がって長い髪の毛をケアし、翌日の準備も完了してから、聖羅はいつも通り眠りについた。

いつもと変わらない、就寝のはずだった。

ふと気づいた時、聖羅はラブホ街に立っていた。

（あれ……？　なんでわたくし……こんな場所に？）

聖羅は首を傾げざるを得ない。

ラブホ街というのは、淫欲が集まりやすい土地柄だ。ネビリムの使徒たちが潜伏先に選ぶことも多い場所であるため、それを追う魔法少女も自然と見慣れてしまう街並みである。

（こんなところにいるなんて……あまり気分はよろしくありませんわね）

なぜ自分がこんな場所に立っているのかわからず、聖羅は戸惑うことしか出来ない。

（ええと、わたくし、何してましたっけ……？　寝ました、わよね……？　それじゃあこれは……）

考えを巡らせようとした聖羅の視界に、突如軽薄そうな男が割り込んで来る。

驚いて、巡らせていた思考がどこかに飛んで行ってしまった。

「キミ、かわいーね。ナンパ待ち？　なら、俺とたのしーことしなーい？」

いかにもありきたりのナンパ男そのものの態度に、聖羅は不快感を覚える。

元来真面目な聖羅は、そういう軽薄な男とほとんど話したことはなかった。

街中でも、聖羅は基本的に制服姿でいるため、厳格な女学院のことを知っていれば、そう声をかけるものはいないのだ。

場所柄仕方ないとはいえ、その不文律もわかっていない様子の男は、気安く聖羅の肩に手を回そうとしてくる。

「冗談は休み休み言いなさい」

その手を払いのけ、屹然と拒絶したつもりだった。

しかし軽薄そうな男はますますケラケラと軽薄そうに笑うだけで、全く怯まない。

「そんな格好でこんなことしといて、そのつもりじゃないなんて嘘だろ？　恥ずかしがらなくていーじゃん」

男が全く怯む様子がないことに、聖羅は違和感を覚えた。

「格好……？　何を、馬鹿な……っ！？」

たまたま近くの店のショーウィンドウのガラスが、鏡のようになっていて、聖羅を『客観的に見た姿』を映し出していた。

そこに映っている自分を見た聖羅は、絶句する。

なぜなら、そこに映っていた自分は——露出度の極めて高い、ボディコンシャス姿であったためだ。

聖羅の凹凸の激しい体にぴったり張り付いており、そのボディラインを異様に強調している。

その上、その胸元はぐっと開いたデザインであり、肩や背中も大きく露出してしまっていた。

普段聖羅が着ている服に比べれば、裸といっても過言ではないほどの露出度であった。

敬虔に生きて来た聖羅の生涯で、一度も身に着けたことのないような、破廉恥な服装だ。

確かにそんな格好をしておいて、男を誘惑するつもりがないなどという言葉は通用しない。

さらに、おかしなことはもう一つあった。

聖羅はナンパしてくる男の手を振り払ったはずだったが、男の手は聖羅の肩に回され、馴れ馴れしく撫で摩って来ている。

その感触も気持ち悪く感じたが——それより気持ち悪い感触が伝わって来ているのは、振り払ったはずの手だった。

聖羅のその手は、男性の股間に伸びていたのである。
ズボンの上から股間を撫で、ペニスの勃起を促していた。
（なっ、あっ……！？　うそ、なんで、ですの……っ！？）
驚愕した聖羅はすぐに男の股間から手を離そうとしたが、それが出来ない。
全く自由に動かせず、彼女の手は引き続き男の股間を撫で回していた。
さらに、不可解な動きは続く。
聖羅の顔が勝手に男の方を向いたかと思うと、唇の端が持ち上がる感触がして、口が勝手に動いて声を発した。
「雌穴相手にわざわざ許可を求めなくてもいのよ？」
（め、雌穴！？）
「男だったら……強引に連れ込むくらい、しなさいな♡」
（なにをっ、言って！？）
自分の心とは裏腹な言葉が勝手に口から零れる。否定しようにも体は一つも動かない。
そのことに焦る間もなく、聖羅の体は男の手を引いて、ラブホテルへと入って行ってしまう。
「シャワーとか、浴びなくていいのか？」
ホテルの部屋に入るや否や、聖羅は男に服を脱ぐように命じ、ズボンを引き下ろした。
「そんな悠長なこと、していられるかしら？」
聖羅の体はそういうと、露わにした男のペニスを早速咥え、舌と唇で刺激を与え始める。

その動きはナンパし慣れている男から見ても恐ろしく手慣れたもので、清廉潔白な外見とは裏腹のテクニックに男は度肝を抜かれてしまっていた。

「んんん……っ！　こいつは……予想外だ……！　相当遊び慣れてるな、あんた……っ！」

（ち、ちがっ、そんなことないですわっ！　ふざけないで！）

「んふ♡　さ、これで準備は万端ですわね♡」

「ん？　そっちの準備は……要らねえみたいだなァ。なんだその濡れよう、淫乱な奴だなぁ！」

ベッドに押し倒され、馬乗りになった男は、容赦なく聖羅の乳房を鷲掴みにして、揉みしだいた。

大きな聖羅の乳房が上下左右に引っ張られる。

普通ならば引き千切られるかと思うほどの激痛が走っていただろうが、なぜか聖羅は刺激に対する快感しか感じられなかった。

（んぎいいいいっ！　ふぎいいっ！）

「うぉ……ッ、やっべぇな、このおっぱい……！　まじ最高だぜ！」

ギンギンに勃起したペニスを、聖羅が再度口で咥えた。

その刺激が強すぎたのか、男はそこで射精に至ってしまった。

「くぉおおっ！　やっべ、出ちまった……ッ！」

生臭い精液が聖羅の口に広がる。

だが想像していたほどその精液は苦くなく――むしろ、驚くほど美味しく感じてしまった。

（な、なんですの、これ、は……っ！　いくらなんでも、都合よすぎます、わ……っ！）

精液の美味しさに目を白黒させて悶える聖羅。

聖羅の心が悶えている間に、聖羅の体は更に動いていた。

「仕方ない殿方ですわね♡　わたくしの胸で、復活させてあげますわ♡」

そう告げると、聖羅の体は男のペニスをその乳房で挟み込み、パイズリを始めた。

聖羅の乳房は腕をフルに使ってきっちり挟み込めば、強烈な刺激を生み出す。

その想像以上の刺激に、男のペニスは一気に復活し、再び固く勃起した状態になった。

「パイズリ、気持ちよすぎ、だろ……っ！」

男がまた射精に達しそうになった。

それを見て、聖羅の体はあっさりとパイズリをやめてしまう。

ペニスから離れて行く体に、聖羅は疑問符を浮かべた。

（もうすぐ、美味しいザーメンが飲めたはずですのに……なんでですの……？）

聖羅は自分の行為に対し、そんな不満と疑問を抱いてしまう。

その問いに応えたのは、男でも、聖羅自身でもなかった。

『ザーメンはね、おまんこで飲む方が何倍も美味しくて、気持ちいいのよ。ほら、おまんこを彼に差し出しなさい』

どこからともなく聞こえて来た、謎の囁き声だった。

聖羅の体はその言葉に導かれるまま、仰向けに寝っ転がり、M字開脚をして性器を曝け出す。

『ほら……わたくしのはしたなくていやらしい下の口に、あなたのぶっといおチンポを突っ込んで、美味しいザーメンを恵んでくださいませ、っておねだりしなさい』

（そ、そんな、こと……っ、言えませんわ……！）

あまりにも破廉恥な言葉すぎて、聖羅はその言葉を口にすることが躊躇われた。

しかし、そんな聖羅に対し、声は再度囁きかける。

『なんで言えないの？　どうせこれは夢なのよ？　夢なら、思い切り楽しまなきゃ、ね？』

その言葉を受けた聖羅は、もやもやした想いが晴れたような気がした。

（そうですわ……夢……夢ですわ。なんで気付かなかったのでしょう）

ラブホテル街に立っているのもおかしいし、聖羅が持っていないボディコンシャスを着ているのもおかしい。

身体が勝手に動くのも、気持ちいい感覚しか感じないのも、全部夢だと考えれば全て説明がつく。

全てが夢なら問題ない。そう感じた聖羅は、自ら股を開いて見せ、見つめている男に『おねだり』をする。

「どっ、どうかわたくしの、はしたなくて、いやらしい下の口に……あなたの、ぶっ、ぶっといおち、おチンポを突っ込んで、美味しいザーメンを御恵みください、ませ……っ」

夢だとわかっているはずなのに、無性に羞恥心が湧いて来て、聖羅は言葉を尻すぼみに小さくしながら、そう男に求めた。

男はそれまでの淫乱さから打って変わった『おねだり』の初々しさ、羞恥を感じられる物言いに、興奮してし

まう。

「ギャップ、って奴か……！？　使いこなしてるんだとしたら、とんでもねえ百戦錬磨の売女だな！」

だが男を興奮させるには十分だった。

ギンギンに激しく勃起したペニスを、容赦なく聖羅の性器に挿入する。

「ふぎっ……！　んあッ♡　あああああああっ！♡」

挿入されたペニスが奥に突き当たっただけで、聖羅は絶頂してしまった。

絶頂の余韻で頭がぼんやりとする中、男に激しく突かれ、また絶頂してしまう。

挿入後、どうすればいいのか聖羅はわからなかったが、謎の声が逐一聖羅を導いてくれたため、聖羅はそれに従って動けばいいだけだった。

『はい、膣を締めずに力を抜きなさい。挿入されるタイミングで、強く引き締めるの』

「んあああああっ！♡　んひいいいっ♡」

男の腰の動きに合わせ、膣に込める力の具合を変えるだけでも、強烈な快感が生み出されていた。

謎の声に導かれるまま、男と何度も何度もセックスを繰り返す聖羅。

いつしか、男も聖羅も意識を失い、絡み合った状態で動かなくなってしまった。


@make_ro

そんな部屋の一角に、聖羅が倒したはずのネイアが現れる。

妖艶な笑みを浮かべたネイアは、聖羅が完全に意識を失っているのを見て、くすくすと笑った。

「こんなに上手くいくなんて思ってもみなかったわ。ふふふっ。やっぱり直接攻撃するより、こういう絡め手が魔法少女には一番有効よねぇ」

そう言いつつ、ネイアは聖羅の下腹部に刻まれた刻印を愛おしそうに撫でた。

実はこの空間、夢であることに間違いはないが、ネイアがその力で作った夢の世界なのだ。

ここでの行動は全てネイアの思い通りになる。聖羅はネイアの作りだしたその空間に囚われてしまっている状態にあった。

「普段なら魔法少女たちの体は忌々しい聖なる力に守られているから……入り込めないのよ。貴女があの男の子を庇って刻印を受けてくれたおかげねぇ」

くすくす、と笑いながらネイアは聖羅に仕組みを解説していた。

「それにしても……少しは後押ししたとはいえ、最終的には自分から思い切り性交してたわねぇ、この子」

途中からはネイアのアドバイスなど必要がないくらいに、男の精を貪り尽くしていた。

簡単に性の快楽を受け入れた聖羅の性格を分析する。

「恐らく、責任感が強くて自分の欲を押し込めていたから……かしら？　はぁ、あたしには全く理解できない感情だわ、我慢とか」

信じられない、という風に呟きつつも、聖羅がその適性の高さを示したこと自体は、喜ばしいことだと笑う。

ネイアが再度聖羅の下腹部に刻まれた刻印を撫でると、その場所に刻まれた刻印はますます濃く、くっくりと浮かび上がっていた。

「これまで押し留めていた貴女の欲望……あたしが解放してあげるわ」

ネイアがそう宣言しながら聖羅の淫紋を撫でると、それに呼応するように、淫紋が微かに発光していた。

◆第八話　終わらない淫夢

それから、聖羅（せいら）は寝る度にネイアによる淫夢を見せられることになった。

ある日、通学電車に乗った聖羅は、痴漢に襲われている女の子を見つけた。

（なんてことですのっ！）

正義感の強い聖羅は、すぐに人混みを掻き分けて、痴漢と女子生徒の間に割り込む。

そして――

「痴漢するなら、わたくしになさいませ！」

そんな痴漢を受け入れる宣言をして、痴漢の手を自分の体に押し付けた。

痴漢はまさか自分から痴漢にされに来るとは思っていなかったのか、最初は驚愕していたが――すぐにその表情を下品なものに変え、聖羅の体を両手で弄り始める。

「んっ♡　あんっ♡　んあっ……！」

無骨な指で体を弄られ、聖羅は満員電車の中で呻いてしまう。

痴漢は聖羅のスカートの中にまで手を差し込み、そのショーツに包まれたお尻や、割れ目をショーツの上から撫で摩る。

そしてすぐに、そのことに気付いた。

「おいおい嬢ちゃん……なんだこの濡れようは？　淫乱ビッチにもほどがあるだろうがよぉ」

くちゅくちゅ、と性器をショーツ越しに弄られ、聖羅は思わず呻いてしまう。

そんな聖羅をさらに責めるべく、痴漢は聖羅のシャツのボタンを飛ばす勢いで胸元に手を突き入れ、聖羅の大きな乳房を直接鷲掴みにした。

「んくぅう……っ！」

「でっけぇ乳袋ぶら下げやがってよぉ……誘ってんだろっ」

無理矢理手の中に乳房が押し込まれ、ぐりぐりと押し潰すようにして刺激が加えられる。

さらに乳首を親指と人差し指の間で挟み、ぐりぐりと擦り付けるようにして乳首を圧し潰して転がした。

「んぐうううっ！！♡」

乳首から生じた強烈な快感に悶える聖羅の周りは、いつしか荒々しい呼吸をする男しかいなくなっていた。

男たちは一斉に聖羅に手を伸ばし、その体の至るところを触り始める。

服が剥ぎ取られるように脱がされ、聖羅は気付けば電車内という公共の場所で全裸にされていた。

そのことを恥ずかしがる暇もなく、全方位から無数の手が聖羅の体を弄り続ける。

乳房やお尻は勿論、お腹や太腿、腕先や髪の毛も容赦なく引っ張られる。

男たちはそれぞれ肉棒を取り出すと、聖羅の体のうち、好きなところを使ってしこり始めた。

口や膣、肛門にもペニスが突っ込まれ、聖羅は体が半分浮いたような状態で責められ続ける。

「んんぅうっ♡　ンンぐうう♡」

激しく犯され、精液をぶっかけられ、どんどん汚れて汚くなっていく聖羅。

ようやく彼女が解放された時――聖羅は電車の床の上で、半身をザーメンに浸らせながら、痙攣して呻いていた。

そんな風に激しく犯される夢もあれば、一見日常と変わらない夢もあった。

いつも通りに制服を身に着けた聖羅は、女学院の校門を潜って校内へと入る。

すると顔見知りの女学生たちが、聖羅を見つけて笑顔を浮かべた。

「ごきげんよう白鶴さん」

「ごきげんよう青木さん」

スカートを軽く持ち上げて頭を下げる。

いわゆるカーテシーに似た仕草だ。それ自体は、普通に行わる挨拶だった。

しかし、夢の中の女学院では、皆股下ゼロレベルの短いスカートしか履いていないため、少しスカートを持ち上げるということは、その下のショーツを見せ付けるということである。

さらに夢の中ではスカートを摘まむやり方も少し違っていて、スカートを捲って股間を見せ付けているような仕草になってしまっていた。

そんな卑猥な挨拶を、至る所で女学生たちが交わしている。

そこに、男性教師が通りかかった。

「皆、おはよう！」

彼はそう言いながら、ごく自然な動きで聖羅の胸を鷲掴みにする。
聖羅はもちろん何も言わず、暫く胸を揉まれるままにしていた。
男性教師の顔が顰められる。
「むむっ！？　お前、ブラジャーを身に着けているな！　校則違反だ！」
「あっ」
聖羅は思わず口を開いていた。
確かに、『ブラジャーを身に着けるべからず』という校則が生徒手帳にもしっかり記されている。
男性教師はそれをチェックするため、挨拶と共に女学生の胸を揉む必要があるのだ。
そしていま、聖羅は校則違反のブラジャー着用の状態になってしまっていた。
「けしからんやつだ！　ブラジャーは没収する！」
男性教師はそう言うと、無理矢理聖羅の胸元を大きく広げた。
そしてその胸を覆っているブラジャーを、容赦なく剥ぎ取ってしまう。
聖羅の巨大な乳房が、ブラジャーという支えを失い、ぶるんと揺れた。
外気が直接当たるようにもなり、聖羅は言いようのない感覚にその身を震わせる。
脱がしたブラジャーを、男性教諭はポケットの中に押し込んだ。
「きちんと校則は厳守しなさい！」
「はい。申し訳ありません……」

校則を破った自分が悪いのだと、聖羅は素直に謝るしかなかった。
そんな聖羅の剥き出しになった乳房を、男性教師は平手で軽く叩く。
「それと、罰として今日一日はこれを着けて、おっぱい丸出しで行動すること！」
そういって教師が取り出したのは、クリップに鈴が付いた簡素な道具だった。
教師は聖羅の乳房を改めて掴むと、その乳首を指先で擦り上げて刺激を与え、勃起を促す。
十分すぎるほど乳首が固くなったのを見て、その鈴付きのクリップで乳首を挟んだ。
「んぎっ……！」
じんじんと強い快感が聖羅を襲う。
聖羅が少し動く度に、クリップが揺れ、それに繋げられている鈴もちりんちりんと音を鳴らした。
とても恥ずかしく、また不意に生じる快感に気が散らされてしまう仕組みだった。
男性教師はもう片方の乳首にも同じようにクリップを取りつけると、満足げに頷いてその場から去って行った。
乳房を丸出しにしているだけでも恥ずかしいのに、その上歩いたり動いたりする度に鈴が音を奏で、自然と注目がそこに集まってしまう。
聖羅は非常に恥ずかしい思いをしながら、授業を受けなければならなかった。
教室では、座る椅子全てに太いディルドが立てられていた。
聖羅が自分の席に向かうと、後ろの席と話している女学生が椅子に座っていた。
「あっ、白鶴さん。ごきげんよう。ごめん、すぐ退く……ねっ……！」

そう言って立ち上がる女学生の膣から、太いディルドが引き抜かれていく。
かなり太いそれをようやく引き抜いた女学生は、今度は横の席に移動して、その席にそそり立っていたディルドを膣に押し込んでいた。
聖羅は自分の席のディルドが、自分以外の女学生の愛液でぬらぬら光っているのを確認しつつ、その上に自分の膣を下ろしていった。
人の愛液で濡れていたおかげで、あっさりと根元まで押し込むことが出来た。
「ふぅ……」
一息吐く聖羅。体の中に常にディルドが潜り込んでいる感覚は何とも心地いいものだった。
少しお尻の位置を変えようとするだけで、ディルドが体の中をぐりぐりと刺激してくる。
その感覚に打ち震えながらも、聖羅は授業を受け続けるのであった。
そして、何度目かの休憩時間。
催した聖羅は、嵌り込んでいたディルドを引き抜いて立ち上がる。
その刺激で思わず漏れそうになってしまったが、なんとか耐えてトイレへと移動する。
普段通りトイレを済ませた後、洗面台に手を洗いに行く。
洗面台からは、蛇口のように壁からペニスが生えていた。その下にはキンタマもぶら下がっている。
「ん……っ」
まずそのペニスを口に咥えた聖羅は、フェラをしてペニスを刺激する。

するとペニスは大きく膨張し、聖羅の口の中に精液をぶちまける。
慌てずそれを一端口で受け止めた聖羅は、口からその精液を手に垂らし、手に擦り付けた。
それこそ、石鹸のように。
そうして暫く手を擦り合わせて精液を馴染ませたら、今度はペニスの左側のキンタマを指で弾く。
するとそのペニスから黄色い尿が迸った。
それを使って、擦り付けた精液を洗い流す。
そして最後に、右側のキンタマを指で弾くと、とろーりと透明な液体が溢れた。
いわゆるカウパー液というもので手を綺麗に洗い、ハンカチで拭い、手洗い終了。
妙に甘ったるい匂いのする手で、聖羅は授業に戻るのだった。
そんな明らかに現実とは違う淫夢を、聖羅は毎日のように見せられていた。

◆第九話　意識汚染

最近聖羅（せいら）は、下腹部が常に熱を帯びているように感じていた。

それは淫紋がかなり進行していることを示し、彼女の下腹部には大きく複雑になった淫紋が光っていた。

ただ、彼女自身はその淫紋をあまりハッキリと認識できていない。

熱を感じはするものの、撫でても特に変化はなく、鏡で自分の下腹部を見ても、なんとなく赤いような気がする、という程度にか認識出来ていなかった。

登校した彼女を、友人が不思議そうに見つめる。

「白鶴さん……なんだか、顔、赤くありませんか？」

聖羅はその指摘にドキリとしながらも笑顔で切り抜ける。

「特に気分が悪いことはございませんわ」

「そう、ですか？　……最近、なんだか具合が悪そうなときが多いですから、お体には重々お気をつけくださいね」

心配した様子でそう呼びかけてくれる友人に、聖羅はとても感謝をしていた。

だが――その気持ちとは裏腹に、淫紋の浸食が進んでしまっていた聖羅は、いらしいことしか考えられない時が増えつつあった。

そんなある日のこと。

淫紋の浸食がさらに進んでしまった聖羅は、周囲の人間の欲望が匂いとして感じられるようになっていた。

じろじろと見られ、欲望を向けられていることを肌で感じてしまう。

特に聖羅の場合、自分の乳房に視線が集中していることを普段から感じていたため、その欲望を向けられている感覚は研ぎ澄まされてしまっていた。

（セックス、したいですわ……おチンポが、欲しい、ですわ……）

その欲求が高まり続けており、聖羅の正常な思考を乱していた。

まともに授業を受けることも出来ない。

思わずその場で腰を動かしてしまったが、特にそれで膣内に刺さっている何かが刺激してくれるということはなかった。

（ああ……そうだ、いまは……現実ですわ……）

そんな風に考えて、がっかりしてしまうことも多くなっていた。

刺激的な淫夢の世界に比べると、現実の世界は真面目で堅苦しいだけで、息がしにくいとさえ感じるようになってしまっていた。

それまでの聖羅ならありえなかった思考の流れに、戸惑いを覚えることしかない。

どうしてここは夢ではないのか、どうしてここが現実なのか、そんな理解不能な感情が生じるようになってし

まっていた。

欲望が満たされない現実に、聖羅の欲望は渇きを覚え、不満を募らせる。

そんな聖羅の耳に、甘く囁く声がした。

『だったら……すればいいじゃない。貴女の思うがままに……好きなように……やってしまいなさい』

（でも……ここは……現実ですわ……）

『現実じゃないわ。夢よ。夢なのだから、貴女は好きに振る舞っていいのよ』

（夢……？　ここは、夢……？）

『好きにすればいいの。夢なんだから』

そのネイアの声は、聖羅の心のやわらかいところを擽り、強く誘惑する。

聖羅はそのネイアの言葉に導かれるまま、今は夢だと思い込んでしまった。

ネイアの声は信じるべきものだという認識が、聖羅の中で構築されてしまっていた。

ガタン、と音を立てて聖羅が立ち上がる。

授業中、突然立ち上がった聖羅に、教室中の視線が集中した。

教鞭をとっていた女性教師が、目を丸くする。

「白鶴、さん？　どうかし――」

教師は最後まで言葉を紡げなかった。

なぜなら聖羅がスカートをたくし上げ、その痴女のようなショーツを露わにしたためだ。

ざわりと教室中に動揺が走る。

「なっ、なにをっ！　白鶴さん！　何をしてるのですか！」

教師が慌てふためいているのは聖羅にも理解出来たが、なぜそんな反応をされるのかわからなかった。

教室の中を見渡すと、反応は様々なものが向けられていた。

顔見知りの女学生たちは、皆一様に目を丸くし、驚愕し、軽蔑するような視線もあった。

一方、あまり見覚えのない男子生徒たちは、女学生と同じく驚愕し、呆気に取られているような視線も多いが、中には興奮している様子の視線も向けられていた。

色々な反応を一身に受け、聖羅は体が震えるのを感じていた。

『いいわね。……ほら、貴女を犯したいって男の子たちが結構いるじゃない。貴女の方から誘ってあげなさい』

ネイアの声がそう囁いてくるのを、聖羅は忠実に実行した。

「ねえ……♡　わたくしの涎を垂らす下の口を、塞いでくれる方はおりませんの？♡」

甘い声で男子生徒たちを誘惑する聖羅。

男子生徒たちは聖羅にそんな声音で誘惑され、心が揺れ動いていた。

だが好奇心たっぷりで目を輝かせている男子でさえ、何かが邪魔して動けない。

その煮え切らない態度に、聖羅は顔を顰めた。

「夢なのですから……皆さんも我慢なんてなさらないでくださいまし」

不満を呟くと、聖羅はリリィシャイニングに変身する。

「セイントエナジー・メイクアップ！」

変身する際、その下腹部に刻まれた淫紋が反応した。

姿こそ変わらなかったが、その体からは魔法少女としての魔力だけでなく、淫魔のフェロモンが同時に発されていた。

シャイニングの光の魔力と淫魔のフェロモンが、教室内を満たし、人々の理性や倫理観を消し去ってく。

「うあっ、あああああっ……！」

「からだがっ、あつ、い……ッ」

「なに、これぇ……っ、あたま、が……」

教室内にいた者たちのうち、特に興奮度合いが高かった男子生徒が、シャイニングに襲い掛かった。

壁に押し付けられ、いきり立ったペニスで貫かれながら——シャイニングはやはりこれは夢だと確信する。

（現実なら、女学院の教室に男子生徒がいるわけがありませんもの……ああ、安心しましたわ……♡）

そう、普段ならその思考は正しかった。

だがシャイニングは都合のいいことばかり考えて忘れていた。

聖ウルスラ女学院は確かに女学院であって男子生徒は存在しないが、月に数度、近くの国公立大学の付属高校と、交流授業が行われているということを。

あえて月に数度男子との交流を行うことで、常識が女学院特有のものに凝り固まらないようにする。女学院はそういう方針を有していた。

だから、女学院に男子生徒がいるのは現実にあり得ることだったのだ。

そのことをシャイニングは認識出来ない。

シャイニングに群がる男子生徒たちだったが、やがてその数が限度を超えると、順番待ちをする者が出始める。

だが性欲の塊になった彼らが、大人しくシャイニングの体が空くのを待てるわけもなく――彼らは手当たり次第に、教室内にいた女学生たちに襲い掛かり始めた。

女学生たちは最初こそ拒絶するように悲鳴をあげるものの、乳房を揉まれたり股間を刺激されたりすると、途端にその理性が性欲に塗り潰され、自ら男子生徒を受け入れるように股を開くようになる。

教室内が乱交パーティの会場のように、無数の性交が行われるようになっている中、シャイニングは同時に複数人の男子の欲望をその身体で受け止めていた。

すでに何度も中出しされ、その腹部はぽっこりと膨らむほどになっている。

「ああんっ♡　んあああっ♡　あふぅうっ♡」

力強いストロークで性器を突き上げられつつ、シャイニングは気持ちよさそうに喘いでいた。

どんなに乱暴に突かれても、シャイニングの膣は快感だけを受け取って、彼女を激しく絶頂させる。

絶頂する度にシャイニングの下腹部の淫紋はどんどん輝きを増し――そして遂に。



中出しと同時に絶頂したのが最後の一押しとなり、シャイニングの下腹部の淫紋が光り輝いた。

淫紋が完成したのだ。

「はーっ……はーっ……はーっ……」

顔を覆って荒く呼吸をするシャイニング。

次の順番の男子が挿入しようとするのを、シャイニングは手を翳して止めた。

深く、長く息を吐く。

「はぁー……ようやく完成、ね♡」

それは聖羅の声だったが、とてつもなく甘い響きを有する、別人の声音だった。

◆第十話　穢れた魔法少女

聖羅（せいら）は吸精事件の犯人を追って、街中を歩いていた。

だがなんとなく何かがおかしいような、そんな不思議な気分でもあった。

（何か、大事なことを忘れているような……そんな気がしますわ……）

違和感の正体に気付けないまま、聖羅は街中をどんどん進んでいく。

明確な目的地があるというわけではなかった。

まるで何かに導かれるように――聖羅はその駅前に辿り着く。

そこからは、人々の悲鳴があがっていた。

「一体、なにが……っ！？」

聖羅が急いでその騒ぎのしている方を見に行くと、そこではネビリムの使徒の戦闘員が通りかかった女性を襲い、犯しているところだった。

戦闘員だけではなく、一般人らしき男性もその乱交に参加していた。

それだけならネビリムの連中が妙な薬か魔法を使って、男性たちを無理矢理乱交に参加させているのかという話になるが、女性を襲っている男性たちに、聖羅は見覚えがあった。

「あの、人たちは……！　吸精事件の被害者たち……っ！？　ううっ！？」

なぜ彼らが、という疑問には、聖羅の脳裏に閃いた、フラッシュバックが応えた。

その光景は、かつてオナニーの際に妄想した、被害者たちと自分がセックスをしているというもの。

聖羅はそれが、現実に起きたことだったということを思い出したのだ。

（そう、ですわ……っ、わたくし、わたくしは……っ、欲望に任せて、あの方たちを……！）

どうしてそんなことをしたのか、自分でもよくわからない。

それがどのように繋がって、被害者たちがいま女性たちを襲うことになっているのかも、わからない。

わからないが、とにかくそれが事実で、吸精事件で裁かれるべきは自分だということだけはわかった。

（わたくしの、せいですわ……！　わたくしのせいで、あの方たちは……っ！）

自分が道を踏み外させてしまったのだという苦悩が、聖羅を襲う。

聖羅は暫く頭を抑えていたが、新しい悲鳴が上がったことで、じっとしているわけにもいかないと思い直した。

「と、とにかくいまは……止め、ないといけませんわ……！　わたくしが、責任を持って、魔法少女として……！」

シャイニングに変身する起句を唱えようとした聖羅の口が、開いたまま動かなくなった。

『本当に、その言葉でいいの？』

（この、声は……っ！　確か、淫魔の、ネイア……っ）

戦い、撃退したはずのネイアの声が聞こえることに疑問を覚える聖羅。

そんな彼女にネイアは呆れ気味に訂正をする。

『そういえばずっと勘違いさせたままだったわね。あたしは淫魔ではなく、夢魔――夢を通じて、強力な洗脳能力を発揮することが出来る存在なのよ』

その種明かしを聞いて、聖羅は全てを思い出し、全てが腑に落ちた。

淫夢を見せられる度に、その浸食は進んでいたのだと。

そしてその淫夢の影響を受けた結果、聖羅は現実でも暴走し、学友を含めた多くの人間の理性を浄化した結果。

犯し犯されることしか考えられない無数の犠牲者を生み出してしまった。

罪悪感が聖羅の心を圧し潰していく。

（わ、わたくしは……わたくしが……っ、救わなければ……ッ）

そう考えようとする聖羅に、ネイアの声が囁く。

『そんなことする必要ないじゃない。本当は、襲われている人たちを助けたいんじゃないでしょう？』

（違うっ、違いますわっ！）

『違わないでしょう。本当は、犯されている人たちが羨ましいんでしょう？』

その言葉に、思わず犯されている者たちの様子を見てしまう。

容赦なく覆い被さられ、膣を貫かれている彼女たち。

その表情は、とても官能に満ちていた。

『ほら、彼女たちだってすぐ順応するでしょう？　本当に嫌がっているわけじゃないのよ。……ほら、あそこ』

新しい女性が男性に捕まり、地面に引き倒される。

必死に抵抗する女性だが、男性の力には勝てず、ショーツをずり降ろされて無理矢理後ろから貫かれる。

悲痛な悲鳴をあげた女性だったが、男性が数度腰を前後させて打ち付けただけで、途端にその悲鳴は嬌声に変

わった。

数十回もピストン運動を経た頃には、甘い声で喘ぎ始め、自分から足を男性に絡めて犯されることを受け入れていた。

聖羅は、そんな光景を見せ付けられてしまった。

『ほら、ね？　本当は皆ああしてセックスだけしていたいのよ。理性が邪魔してるだけ。本能的には皆一緒なの』

それは聖羅を堕落させようとする、ネイアの甘い罠だということは、聖羅もよくわかっていた。

わかっていたが――その言葉は抗い難い誘惑となって、聖羅の心に沁み込んでいく。

淫紋が熱を発し、聖羅の体は激しく火照っていく。

（羨ましい……ですわ……）

犯されている女性たちを見て、そんな風に感じてしまう心が止められない。

『それなら、どうすればいいのか……わかるわね？』

ネイアの声が、内側から響く。

聖羅はこれまで散々、その声に誘惑され、導かれて来た。

その度にさらに気持ちよくなれたという事実が、聖羅の気持ちを快楽へと傾けていく。

（この声に従えば……もっと……もっと気持ちよくなれる……っ）

聖羅のその考えは、ただの妄信でしかない。

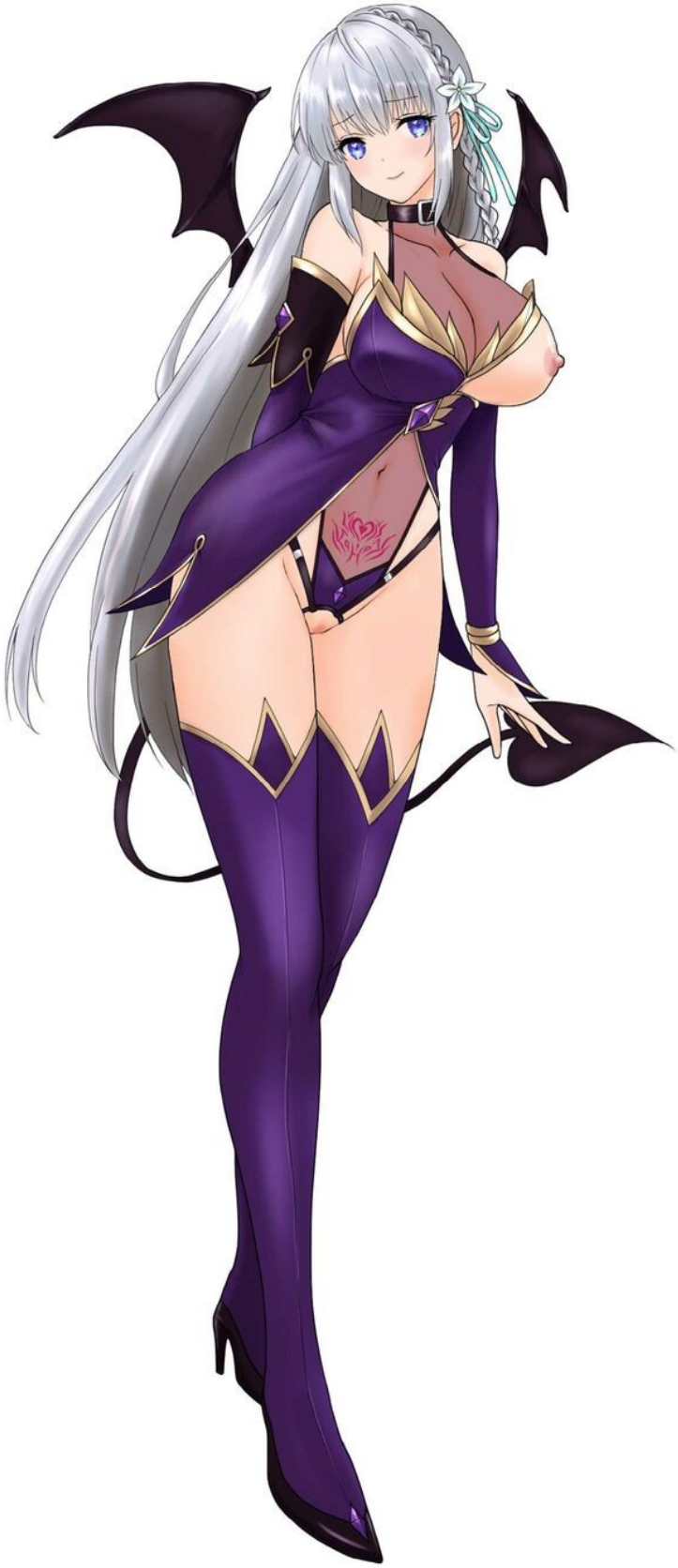
冷静に考えればわかったかもしれないが、その時の聖羅に、冷静な思考など一つも残っていなかった。

欲望に突き動かされるまま、聖羅は堕落の起句を口にする。

「ネビルエナジー・メイクアップ♡」

そう彼女が唱えた瞬間、周囲に立ち込める欲望のエナジーが聖羅に収束する。

聖羅は――ネビルシャイニングへと、変身を遂げた。



清潔感のある水着のようなリリィシャイニングのコスチュームから一転。
小悪魔的な色合いに変わり、その背には淫魔と変化した証である悪魔の羽根が生えていた。
腰のあたりから先端がクローバー状になっている悪魔の尻尾も生えた。
淫紋が見えるように透けている素材が腹部を覆い、片乳と股間に至ってはもろ出しで何も覆っていない。
いかにも淫魔と言わんばかりの、淫乱極まるコスチュームを、ネビルシャイニングは身に着けていた。
解き放たれたような感覚に包まれ、その余韻に浸った後、シャイニングは目を開く。
気づけば、少し場所が移動していて、シャイニングの目の前には幼い兄妹の姿があった。
その兄の顔を見て、シャイニングは目を瞬かせる。
「あなた……確か……」
見下ろすシャイニングに対し、その少年は手に握った棒切れを向けた。
「ぼ、僕は男だから……ッ、大事な人を……妹を、守るんだ……っ！」
棒切れの先端を震えさせながらも、その少年は懸命にそう宣言する。
その言葉を聞いたシャイニングは、ネイアと初めて戦った時に助けた少年だということに気付いた。
（『男なら大切な人を守れ』……そんなことを、言いましたわね）
シャイニングのその時の言葉を早速実践しているらしい。
少年のことを微笑ましく感じたシャイニングは、一瞬で距離を詰め、少年の持っていた棒を取り上げた。
「あなたにいいことを教えてあげましょう。……男なら、女は犯すものですわ♡」

以前とは全く違うことを言いながら、シャイニングはその身体からフェロモンを漂わせる。
それをもろに吸い込んでしまった男の子は、その場にへたり込んだ。
「あぅ……っ！？　ううっ……！」
「ふふっ、もう精通はしているのかしら？　まあ、どちらでもいいですわ」
シャイニングはそう怪しげに呟くと、少年の目の前で腰を屈め、少年の眼前に性器を突き付ける。
すでにシャイニングの性器は溢れるほどの愛液が滲み出しており、とても艶めかしい見た目になっていた。
「ほおら、ここが女の子の大事なところ……男が犯すべき場所ですわ♡」
その秘所に指を入れ、弄って見せるシャイニング。
男の目はその性器に釘付けになっていた。
ちらりとシャイニングがその男の子の股間を見れば、子供ながらに勃起していることが窺いしれた。
「ふふっ、小さくても男の子ですわね♡」
シャイニングは男の子の頭を掴み、その頭を自分の股間に押し付ける。強制クンニを実行した。
「んぶぅっ！？　んぅうぅぅつ……ッ、ふぐうううっ……！」
最初は嫌がる様子を見せた男の子だったが、強烈なマンコの吸引力に、すぐに屈してしまった。
舌を伸ばしてシャイニングの性器を舐め始める。
「んじゅっ、じゅるるっ、んじゅるるるっ……！」
啜る勢いで性器内に溢れた愛液を呑み込んでいく男の子。

そんな男の子の頭を撫でながら、シャイニングは優しくさらに奥に男の子を導いていく。

「上手ですわ。そう、もっと奥まで舌を伸ばすんですの。そう、しっかり鼻で息をして……押し付けて、舌を伸ば、すっ！」

男の舌が、偶然シャイニングのGスポットを突いた。

「～～んあぅっ！！♡♡」

予期していなかった強烈な快感に、シャイニングは瞬く間に絶頂してしまう。

激しく噴き出したシャイニングの潮を、男の子は顔面でもろに受け止めることになった。

「はぐうう～～っ！！」

淫魔の体液を取り込んで、一気に性的な機能が発達した少年は、ズボンの中で初めての射精を――精通を迎えた。

その臭いで、すぐにシャイニングは少年がズボンの中で暴発させてしまったことを悟る。

「あら……勿体ないことをさせてしまいましたわね」

手早く少年にズボンを脱がせ、シャイニングはその精液を舐め取った。

「はぁ……最高ですわぁ……♡　初めての精子の味は格別ですわねぇ♡」

少年のペニスが再び元気を取り戻す。

シャイニングは悪いことを思いついた目で、少年の前にM字開脚で座り込んだ。

「ねえ、あなた。わたくしを犯しなさいな。その固くなったおちんちんを、わたくしのこの穴に入れるだけです

わ。簡単でしょう？」

シャイニングは自分の膣を指で広げながら、少年を誘惑する。

「女の穴に入れると、さっきのズボンの中の比じゃないくらい気持ちよくなれますわよ♡」

男の子にしてみれば、驚愕の話である。

ズボンの中に暴発しただけでも、男の子がかつて経験したことがなかったほどに気持ちよかったのだ。

それと比にならないくらい気持ちいい感覚となれば、どれほどになるのか。

男の子はふらふらとシャイニングに近付いていく。

そんな男の子の背後で、彼の妹の悲鳴が響いた。

男の子が驚いて振り返ると、戦闘員の一人に妹が抱き上げられているところだった。

戦闘員はそのペニスを露わにしており、妹のパンツを強引に脱がして挿入準備を整えている。

「やあああっ！　やだあああっ！　お兄ちゃんッ、助けてぇ！」

必死に助けを求める妹に、兄の目に炎が宿りかけたが、それより前にシャイニングがその戦闘員に命じる。

「まだ犯しちゃダメですわよ。……さあ、わたくしを犯すのであれば、あの子は犯されますわ」

シャイニングを犯さないのであれば妹は助かる。

欲望のままシャイニングを犯せば、妹も犯される。

少年に対し、選択を委ねた。

果たして少年はどうするのか、シャイニングはニヤニヤと笑いながら、少年の選択を見守る。

少年は少しの間、ぐるぐると悩んでいたが――やがて、妹の方ではなく、シャイニングの方に近付く。

妹の目が零れんばかりに見開かれる。

「……ごめん」

助けを求めて叫ぶ妹に対し、兄の答えはただそれだけだった。

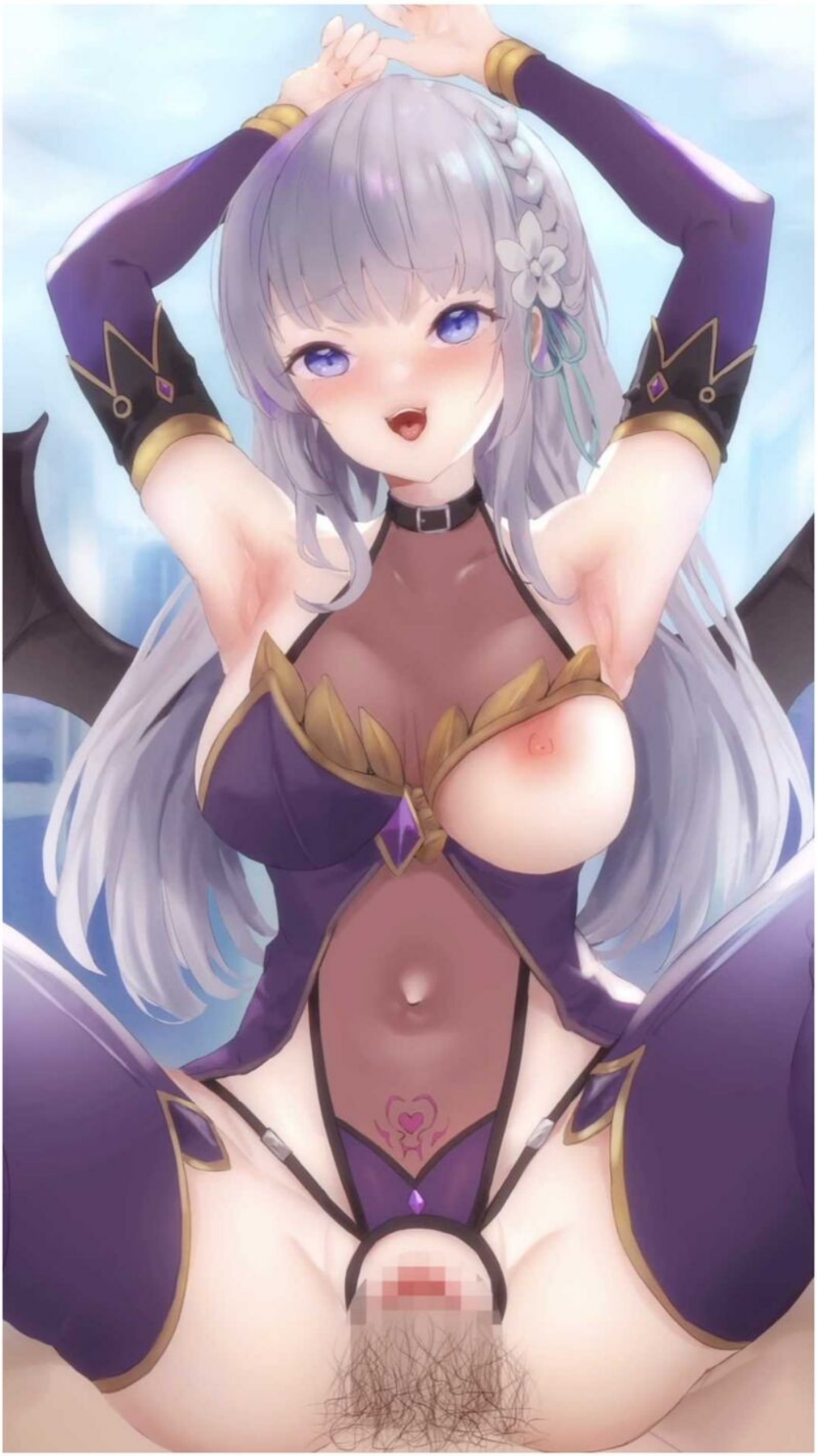
一人のただ欲望に支配される男になった少年は――シャイニングの体に飛び込むようにして、そのペニスをシャイニングの中に挿し込んだ。

小さなペニスであり、シャイニングにしてみれば物足りないレベルの太さだ。

だが、いまは『守るべき妹を見捨てて欲望のまま犯すことを選んだ』というシチュエーションが込みで、大変興奮するものになっていた。

「んあああああっ！？♡　なにっ、なにこれっ！♡　すっご、すっごいいっ！♡」

少年のペニスの大きさに合わせて強く膣を締め付け、シャイニングは少年に極上の膣の感触を味合わせてやる。



その感動に打ち震えながら、腰をひたすら動かす少年の背後で、彼の妹は戦闘員によってその処女を散らされていた。

当然大人のペニスを子供のマンコに入れるのだから、少女が味わう苦しみは筆舌に尽くしがたい。

幸いなのは、この場にネビルシャイニングがいることだろう。

シャイニングは少年のペニスを堪能しつつ、新たに生み出した光の魔法を直接その少女に向けて放った。

喉が潰れる勢いで泣き叫んでいた少女の声が急速に弱まり、そして程なくしてその叫びは嬌声へと変化していく。

シャイニングの魔法が妹の頭の中の嫌悪感や常識を浄化し、残った快楽の虜になったのだ。

「これでよし……ですわね。さて……」

妹の方の対処を終えたシャイニングは、改めて自分を犯している少年を見つめた。

少年はすでに何度も射精してしまっているようで、少しずつその元気が失われて行っていた。

「そんな程度でへたり込んでいては、雌を堕とすことなんてできませんわ。しっかりなさい」

平手で少年の尻を叩き、強制的に覚醒させる。

「ほら、もっと腰を落として！　体重を乗せて突くのですわ！」

激しいレイプの仕方を教え込むシャイニングに対し、性根は目を回しながら必死に腰を動かしていた。

命を削る勢いで腰を振り、精子を振り絞る少年の様子に、搾り取り続けるシャイニングは非常に充足した感覚を覚えていた。

（なるほど……これが……命を吸い取る充足感なのですわね……んんっ、癖になりそうですわ♡）

かつてのシャイニングは、『持つ者は持たざる者を守るべき』という価値観を持っていた。

だがネイアと半ば融合し、その魂までも完全に塗り潰された今となっては、『強者は弱者を犯し、全てを奪う』というネイアの価値観が理解出来るようになっていた。

とても気持ちのいい、わかりやすい価値観に、シャイニングは浸る。

「ふふふっ……ほら、もっと腰を動かしなさい。あなたが気絶するまで、搾り取ることはやめませんわよ？」

男の子の懸命な行動を眺めつつ、シャイニングはそう宣言した。

そしてその後、本当に男の子が力尽き、干からびる寸前で気を失うまで――シャイニングは少年から精液を搾り取り切ったのであった。

こうしてリリィシャイニングもまた、ネビルシャイニングに成り果てたのだった。

◆エピローグ

私立白雪女子高校の生徒会室で、女性たちが淫蕩の限りを尽くしていた。

性欲に溺れている様子で、あられもない格好で絡み合い、伝統ある生徒会室をその汗と愛液で汚している。

その中心になっているのは、生徒会長であり、風紀委員長でもある黒桐月奈（こくとうるな）であった。

本来であればそのような行為を真っ先に咎め、戒めるべき立場のはずの彼女。

そんな彼女が率先して、女生徒たちに命令し、自らの体を弄らせていた。

代々の生徒会長が座る椅子に腰かけた彼女の足下には、女生徒ではなく、この学校に勤める女教師がいた。

彼女は月奈のような生徒を導く教職にありながら、月奈の股間に懸命に舌を這わせ、クンニを行っていた。

「んぷっ……っ♡　んぁ……っ♡」

舌を伸ばし、丹念に月奈の大陰唇を舐めていく。陰唇のシワをなぞるように舌先を動かし、さらに丁寧に性器を舐めていく。

股間を女教師が舐めるのと同時に、脇の下も舐める担当がいた。

月奈の左右にから挟み込むように、二人の女子生徒が月奈のつるりとした腋を舐め、さらに手を使ってそれぞれ片方ずつ乳房を揉んでいる。

右の乳房を揉んでいる女子は掌で鷲掴み、パンか餅を捏ねるように動かし、左の乳房を揉んでいる女子は、指先を乳房に食い込ませるようにして揉んでいる。

それぞれ違う揉み方であるゆえに、刺激に飽きるということがなく、月奈は気持ちよさそうに喘いでいた。

他にも月奈の足先を舐める者、月奈の手の先に胸や股間を突き出し、弄って貰っている者、月奈の背後から首に腕を回し、耳を甘噛みする者など――月奈に関わっているだけでも七人もの女子生徒が乱れていた。

月奈に奉仕する、あるいは弄ってもらうということは、彼女たちにとって一種の羨望の対象になることのようで、生徒会室にはそんな月奈たちの様子を羨ましそうに眺めている女子たちがたくさん存在した。

溢れた女子の中には、辛抱が溜まらなくなり、率先して他の女子と絡んで、互いを慰め合う者もいる。

多数のあられもない格好をした女子たちが入り乱れ、互いに慰め合う様は、見るだけでも十分に楽しめるものだった。



そんな月奈の股間を舐めていた女教師が、舌を伸ばしてさらに月奈の膣の奥を目指す。
舌が体内に入り込んで来る感覚に、月奈は体を仰け反らせて、反応した。
「んっ……っ！　ふぁ……っ！」
さらに滲み出した愛液を、女教師は躊躇なく啜っていく。
体の中から愛液が吸い出されるような感覚を覚えた月奈は、女子生徒たちを侍らせている体を震わせ、絶頂を迎えた。
「くうっ、ううううっ！♡」
月奈の膣から潮が噴き出し、女教師の口の中に流れ込んでいく。
それを女教師はとても人には見せられないような蕩けた表情で、美味しそうに飲み干していっていた。
「はー……はー……はー……くひっ、くひひっ」
絶頂の余韻に息を荒げていた月奈は、その端麗な容姿らしかぬ下品な笑い声をあげる。
「くひひひっ……相変わらず、最高の身体だぜ」
そう呟きながら、月奈は周りの女子たちを一端下がらせる。
月奈の体を完全に乗っ取った憑依怪人――ヒュウは、その奪った存分に堪能していた。
「ネビルエナジー・バースト♡」
ヒュウはネビルダークネスの力を発散させる。
闇の魔力が周囲に撒き散らされ、女子生徒たちはその余波だけで激しく絶頂し、悶えて床に転がった。

その中で唯一、股間を舐めていた女教師だけが無事だった。
だがその無事を喜ぶでもなく、むしろ絶望した表情を浮かべている。
「あ、ああ……なぜ……？　なぜ、私には恵んでくださらないの……？」
闇の魔力を受けた女子生徒たちは、まるでドラッグでも服用したかのように、悲惨なまでに絶頂し、悶えている。
実際下手なクスリを使うよりも強烈な快感を得られるため、彼女たちがダークネスに奉仕するのはその闇の魔力を恵んでもらうためなのだ。
周囲の女子生徒たちはそれを受けられているのに、自分だけ除外されたことに、女教師は絶望していた。
そんな女教師に対し、ダークネスは邪悪な笑みを向ける。
「せっかちな奴だな……安心しろ。中々いい舌遣いだったから――」
黒い靄のようなものがダークネスの股間に集中し、男性器の形を取る。
それは影で出来た触手チンポだった。
女教師の目が期待に輝く。
「こいつでご褒美をくれてやるよ」
そうダークネスは告げると、女教師の上半身を机の上に寝かせ、後ろからその膣を思い切り突いた。
影で出来たチンポは闇の魔力そのもので出来ているため、それによって得られる快感は並大抵のものではない。
「あひいいいっ！　んぎいいいいっ！」

怒濤の快感が叩き込まれ、女教師は激しく悶えた。
そんな女教師の状態など一切考慮せず、ダークネスは腰を動かして子宮の奥まで影チンポで打ち抜き、犯す。
そして最終的には闇の魔力を凝縮した精液のようなものをその体の奥でぶちまけた。
「んぎゃあああっ！」
獣のような咆哮を上げ、そしてガクリと力尽きる女教師。
闇の魔力を漏らしたままセックスしていたため、その余波で周囲の女子生徒たちもすっかりイキ狂って悶えていた。
腰を引いて女教師の膣からペニスを引き抜きつつ、ダークネスは再び椅子に腰かけて一息吐く。
ダークネスの前には、射精された液体を力なく垂れ流す女教師の股間がある。
「ふぅ……最高の体に、最高の環境……全く、楽しくて仕方ねぇぜ」
そうダークネスが満足げに呟いた、次の瞬間だった。
誰も入れないようになっているはずの生徒会室の扉が外から開かれる。
驚きながらそちらに視線を向けたダークネスは、扉の向こうに純白の魔法少女が立っているのを見た。
肩を怒らせ、憤慨した様子でダークネスを睨みつけて来る。
「月奈っ！　何をしているんですの！？」
奪った体の名前を呼ばれたダークネスは、すぐに月奈の記憶を探り、該当する相手の情報を引き出す。
（こ、こいつは……！　リリィシャイニング！？　くそっ……！　バレたのか！）

慌てて臨戦態勢を取るダークネス。不意打ちだったため、ダークネスは何の準備も出来ていない。
完全に不利な状況だった。
だが、シャイニングはそんな慌てふためくダークネスの様子を見て、なぜか噴き出すようにして笑う。
侮られているのかと思いかけたが、それにしては笑い方に邪気が籠っていない。
「ぷふっ……なーんて、ね。驚きました？　わたくしですわ――あたし。わかる？」
聖羅（せいら）と違う気安い呼びかけ、そして妙に馴れ馴れしい言葉遣い。
ダークネスは一瞬呆けたが、すぐにその意味を悟る。
「ああ、なんだ……お前、ネイアか」
二人は顔見知りだった。あくまで同じネビリムの使徒という程度の認識で、特別親しいわけではなかったが、目の前にいる相手がその相手だということがわかる程度には互いのことを知っていた。
「シャイニングに浄化されたって聞いてたけど……お前も体を奪ってたってわけか」
「結構苦労したけどねー。あんたはダークネスかぁ。最強なんでしょ？　ちょっと羨ましいわね」
奪った月奈と聖羅としてではなく、憑依怪人のヒュウと夢魔のネイアとして、二人は会話を始めた。
「まさかこの二人の体がこんなに簡単に揃うとはね……」
「思いがけない収穫だよなぁ。それで、わざわざ俺のところに来た理由は？　なんかあるんだろ？」
そうヒュウが問いかけると、話しが早いとネイアは頷く。
「この二人の体を手に入れられたのだから、やるべきことはひとつよ。ネビルフレアと、ネビルマリン……その

二人以外の、使徒化した魔法少女たち――全員を封印から解き放つべきだわ」

ネイアとヒュウに乗っ取られる前の、人類の味方であった月奈と聖羅。

その二人が激闘の末に封じたビリムの使徒化した魔法少女たちを解き放とうというのだ。

そう提案するネイアの言葉に、ヒュウは顔を顰める。

「そいつは俺も考えたが……あの封印はこのダークネスとそっちのシャイニングが力を合わせて練った強固なものだ。この最強の魔法少女の力を持ってしても、たぶん無理だぜ？」

実のところ、最強の魔法少女の力を得た際、ヒュウは真っ先にそのことを考えた。

仲間意識というよりは、自分以外にも魔法少女に対抗する勢力を生み出したかったという打算が大きかったが、封印を解こうとしたのは事実だ。

だが、封印の強大さを遠目で確認した時点で、とても単独では解除できないものだということがわかってしまった。

「封印をかけた時には、こいつとそいつで完璧に心を重ね合わせたんだろうな。単純に二人がかりでかけたって感じの封印には見えなかったぜ」

「封印はあたしも確認したわ。あれを突破するには、この二つの身体を使って、封印をかけた時と同じくらい心を重ね合わせて、力を束ねる必要があるでしょう」

「確かにな。……でもそうだとすると絶望的だろ。俺たちには互いに対する信頼関係なんて、ないに等しいんだから……」

「本当に、そうかしら？　あたしたち、お互いのことはよくわかってるでしょう？」
持って回った言い回しであったが、ネイアの言いたいことを、ヒュウも理解する。
「なるほどな、それなら――」
「ええ。だったら――」
二人揃って、とても似通った、非常に邪悪な笑みを浮かべる。

ネビルダークネスとネビルシャイニングは、早速行動を開始した。

『ネビリムの災禍』を封じた地には、手の空いた魔法少女たちが封印が解けていないかと見回ったり、それぞれの力で容易に近づけないように結界を張ったりしていた。
警備も配置されており、再び災禍が解き放たれないよう、厳重に管理されている。
その十重二十重に構築された警備を、真正面からダークネスとシャイニングは打ち破った。
ただでさえ、ダークネスの力は魔法少女の中で最強と呼ばれるのに、そこにサポート特化のシャイニングの力が加われば、二人を遮ることの出来るものなど、早々存在しえない。
最後の結界をダークネスが打ち砕き、ついに封印に迫った。
かつてリリィダークネスとリリィシャイニングが協力して施した封印は、いまもなお絶対の強度を持ってそこ

に聳え立っている。

ダークネスが合図をすると、その封印の地に女たちが踏み入って来た。ダークネスが支配下に置いた女性たちだ。

全員異様に爛々と光る眼をしており、中には自分の性器を弄りながら歩いている者もいる。

彼女たちはダークネスの闇の魔力によって、常時発情状態にある。

その反対側から、今度は男たちが封印の地に踏み込んで来た。

シャイニングが搾精し、支配している男たちだった。

いずれも欲望に囚われ、血走った眼をしており、その股間の物はいずれも膨張し、勃起している。

シャイニングの手によって、女を犯すことしか考えられなくされた者たちだった。

ダークネスとシャイニングの軍団が、封印の地に集められていた。

「さて……皆、良く集まってくれたわ」

「ふふふっ、今日は思い切り楽しんでくださいませ」

シャイニングが手を叩くと、小さな光球がその間から発生し、頭上高く飛んだところで、爆発した。

ピンク色の明かりがその場にいる全員を照らしていった。

「大乱交パーティの、始まりですわ！」

その合図に従って、一斉に乱交が始まった。

ダークネスの連れて来た女性たちが、シャイニングの連れて来た男性たちに襲われ、犯され始める。

お互いに顔も名前も知らないだろう。

仮に知っていたところで、セックスするような間柄であるはずもない。

年齢層も何も関係なく、手当たり次第に目に付いた相手と性交を始める人間たち。

そんな光景を中心から眺めつつ、シャイニングは恍惚とした表情を浮かべていた。

「はぁ……♡　これですわぁ♡　ネビリム様の求める正しい世界……♡　誰もが幸福な、素晴らしい世界ですわ♡」

「ふふっ、シャイニングったら……涎垂らしちゃって、仕方ないわね」

理想的な世界が実現されているという状況に、シャイニングは体を捩って悶えている。

そんなシャイニングを、ダークネスは抱き締め、キスをし、その股間に手を這わせ始めた。

「んあああ♡　ダークネスぅ♡」

「んっ♡　二人で、気持ちよくなりましょ？　シャイニング♡」

ディープキスをして、互いの性器を弄り始める。

大乱交が起きているど真ん中で、二人はレズセックスを始めていた。

淫乱な空気がさらに濃縮され、二人を中心に渦を巻いて発生していた。

ヒュウとネイアには強固な信頼関係にあるわけではない。

そんな二人が、かつて自分たちの身体の元の持ち主たちが行った封印の儀式を打ち破るには、それと同等以上の信頼関係を有する必要がある。

ヒュウもネイアも一匹狼タイプの怪人だったため、封印をかけた時の二人ほどの信頼を築くことは難しい。
だが何も心を重ね合わせるというのは、信頼だけではなかった。
二人の共通する最も強力な感情は――淫欲。
気持ちよくなりたいという想いだけは、お互いに間違いなく抱いていると信じられる感情だった。
真正面から抱き締め合い、ディープキスを続ける。
口の端から垂れ落ちた唾液が、二人が押し付け合う胸の合間に広がっていった。
「んぅうっ♡」
「はうぅっ♡」
ただでさえ滑らかで気持ちのいい感触が生じているところに、その唾液はさらに一つ上の気持ち良さを生み出す。
二人は競うようにして胸を押し付け合い、さらに腰を擦り合わせて互いの股間を刺激し合う。
互いの太腿を跨ぎ、股間を擦り付け合っていた。
ぬるぬるした感触が太ももに広がり、互いに感じていることを共有し合う。
やがて、二人の交わりはさらに激しさを増していった。
手で互いの体を弄り合う。肛門も弄り合い、どんどんその気持ちを重ねて、高めていく。
「んあっ！♡　はぅっ！♡　あっ、あっ♡」
二人が気持ちを昂らせるにつれ、周囲に二人の練った魔力が漏れ出した。

ただでさえ獣のように乱交していた周囲の者たちが、さらに一段階理性を飛ばし、相手を壊し、搾り枯らす勢いで交わりを強めていく。

とても人間同士の性交とは思えない激しく淫乱な宴が行われていた。

淫らな欲望の力が迸り、周囲の者の欲望が渦を描いて中心の二人に――ダークネスとシャイニングへと集約していく。

二人ですら想定していなかったほどの欲望の力が、二人の体に流れ込んで来る。

「あひいいいいいっ！♡」

「んひゃあああああっ！♡」

二人の体が激しい熱を宿し、こすり付け合う行為によって得られる快感がさらに増す。

ダークネスとシャイニングは大きく足を開き、その股間同士を、柔らかく隆起した恥丘同士をぶつけ合う。

互いに性器はすでに激しく濡れており、割れ目同士が擦れ合う感触が二人を夢中にさせた。

そしてついに。

二人のクリトリスが皮を押しのけ、ぷっくらと膨らんで存在を主張する。

溢れ出してこすり付け合った愛液に濡れ、すでにドロドロになったそのクリトリス同士を、ダークネスとシャイニングは力強く擦りつけあった。

「「～～～～～ッッッ！♡♡♡」」

激しく膨張したその肉芽によって生まれた快感が、最後の後押しをする。



二人は意識が真っ白になるほどの絶頂を同時に迎えた。
その瞬間、二人の心は間違いなく一つだった。
それこそかつて月奈と聖羅が心を重ね合わせた時よりも、遥かに強く結び、絡みついていた。
原始的な本能に従っているのだから当然だったが、最高に純粋な形で重ね合わさったことに違いはない。
絶頂によって生み出された黒い光が、封印を照らし、焼き尽くす。
誰にも解けないとされていた封印が、ついに解けた。
封印を表す紋章に亀裂が入り、空間が歪んでその場所が変質していく。
封印から解き放たれた場所には――ネビリムの使徒と化した魔法少女たちが立っていた。
ここに封印されていた魔法少女たちが、解き放たれてしまったのだ。
ダークネスとシャイニングは、そんな光景を抱き締め合いながら見つめていた。
無事に封印が解けたことを見ると、悦びを露わにした互いの顔を見合わせ、笑いあった。

「「さあ――『ネビリムの災禍』の続きをはじめましょう」」

解き放たれた魔法少女たちが、動き出す。
彼女たちを止められる魔法少女・リリィダークネスとリリィシャイニングは、もういない。

おわり






















@moke_ro


@moke_ro





